







○
もゝもさくらも、
たをればたきい、
散れば塵。

雪と窓から入る春の
色のなごりを羽帯に
そつとあつめて小机の
上になほすや花の籃。

いろをあはれみ香を惜み
しづかに祭る花の魂、
こがれ心のやるせなう
むすんでとけて又むすぶ
香のけむりのかく偽名を
とめて見たのがこれかいな。

露 伴 題

自序

春の野の、さまざまの花摘み集めて、それを籃に溢るゝばかりにさし、花籃をつくるは、手弱き乙女のわざ也。思ふふしのくさくさをつくして、一莖の短かき筆にまかせ、はしたなきひなごのと綴り合はせ、ろを掻き集めて、花籃集と名けんとは、あまりに似やはしからぬとあがら、あれもまた、久方の春の神手にひらかれて、その春の胸より咲き出でし、くさぐさの花とも見るべくば、是れをも罪なきわざとして、かゝる名を命せしを許すべき也。

愚かあるかな、夫子、卿がものし、數千萬言、世の國の司さに讀ませ聞かすべきものも多かるに、などてろをば集めやらす

かゝる用なき繰言を、かくも集めて世に出すにや。さりとはあまりに心弱きとあらずや。さればにや、經國の文章、半文錢にも値せず、壁を抱いて罪あらば、齊王の門に瑟を鼓しにし人もまた愚か也。用なき繰言を、世に出ださんは平らけき御代の駿にと也。世に用なき人を容るゝの地あり、用なき言をも味ひつべき者だにあらば、そはめてたき御代のと知らる可し。愚かなるべしとは覺えず、却つてその賢きわざなるを知る。かくて花籃集をばものしてし也。

明治三十五年四月墨田のほとりにて

犀東居士識す

花籃集目次

◎天然の大文章……………一	◎病牀の瓶梅……………一六
◎石 鱸 玉……………三	◎楫 の 葉……………一七
◎一世紀の生存……………四	◎梅花の貧相……………一九
◎豈に悲まんや……………六	◎春野の摘草……………二〇
◎性格の精粗……………七	◎朝陽櫻花の圖……………二一
◎善くなすあるなし……………八	◎花 籠……………二三
◎水上の快走……………九	◎凌雲閣の花見……………二四
◎歳旦の詩大王の風格……………一一	◎花 見 舟……………二五
◎一世紀の筆を焚く……………一四	◎花見の道化……………二七

泡沫幻観

錦畫雜記

◎暮春の移居……………二九 ◎水……………五九

梅下偶語

◎梅花の同情……………三二 ◎雨中の棹歌……………五五
◎梅花と管公……………三四 ◎籠花立の椿……………五八
◎華嚴の研究……………三六 ◎造花の櫻……………六〇
◎華嚴の繪卷……………三八 ◎魚三味……………六四
◎月宮殿の繪畫……………四一 ◎將棋の難關……………六五
◎氷山の衝撃……………四三 ◎愚の上乗……………六八
◎凍死と火定……………四五 ◎道樂ハ皆愚也……………六九
◎極寒夜と極炎天……………四七 ◎神代の研究……………七〇
◎完全ハ思む可し……………四九 ◎銀の橋……………七一
◎林中の獅子吼……………五二 ◎東風と北西の空……………七三
◎船頭の喧嘩……………五三 ◎鵜の群……………七五

◎燕の如き雲……………六七 ◎豊公醜醜の花見……………九九
◎梅咲きし朝……………七七 ◎朧月の墨隄……………一〇三
◎金衣公子……………七八 ◎霞の筑波……………一〇五
◎十九回の雷鳴……………七九 ◎佛誕生と喇嘛佛……………一〇七
◎王者の花覇者の花……………一〇八

紫雜記

◎七色の長虹……………八一 ◎櫻の賦……………一〇九
◎古雛の新衣……………八三 ◎鏡と花……………一一一
◎雛と梅花……………八六 ◎獅子と花吹雪……………一一三
◎色絲の手鞠……………七八 ◎五色の唾……………一一六
◎桃花と梅花……………九〇
◎海洋中の植物園……………九二
◎船の別荘……………九四
◎豊太閤吉野の花見……………九六

目次完

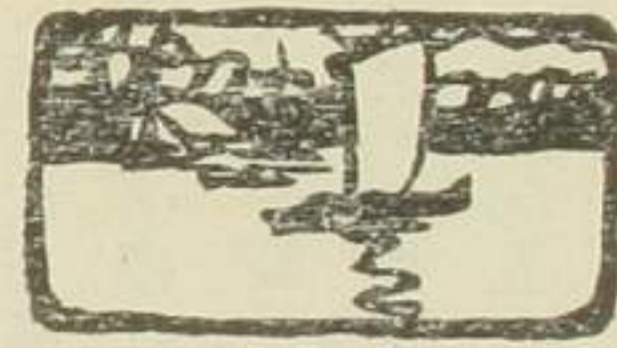
花籃集

國府犀東述

泡沫幻觀

◎天然の大文章

宇宙の間を俯仰するに、空間と時間との冥運、無窮より來りて無窮に去る。其間井然として序をなし、整肅なる脈絡、無限を貫いて一串す。日月星辰、凡ての惑星、凡ての恒星、靜止する者、一定の系統をなし、行動する者、亦皆一定の軌道に遵ひ、氣象の變



化、雲雨霜雪、春霞秋霧、氣壓溫度相錯綜して、絶えず季節氣候の差異を生じ、陸には山岳の地脈、河川の分水、湖澤の滙合、火山脈の分布、地層の形成、植物帯の配布、動物圏の配置、海洋には潮流の交代、貿易風の更迭、水産物の分敷、凡べて一貫せる秩序系統をみし、變轉運移、暫くも休せずして、轉化變形亦限りなし、動學の方式、靜學の方式と相交はり、直線曲線、平面立体、有色無色、硬軟強弱、大小長短、高低淺深、波瀾曲折、開闔抑揚、細密は微分尙ほ之を極むるを得ず、嵩大は積分亦之を究むるに足らず、疾き者は光線の速力、捷ある者は、電氣の流通、數學の力、得て測り難し、人類其間に在つて、地球の上に、三千年の歴史を形成し、其來るを知らず、又其之く所を知らず、天然の大文章、其榮然とし序を

乱さず、而かも其變化の測り知る可らざる者、此の如きあり、誰れかいふ、一枝の筆よく此玄を鈎し、其幽を闡くと、天然大文章の秘密、たゞ悟得すべきのみ、智慮の以て、之を測る如きは、人事に非ざる也。

◎石 鹼 玉

兒童集りて、竹の管を口に、石鹼を解ける水を容れし、飲け茶碗を片手に、シヤボン玉を吹き、其大なるを競ふ、強く吹く者は、玉の大なるを得ず、直ちに破裂して小珠となり、飛散す、巧みに大なる玉を吹く者は、徐ろに口中の氣を管に吹き入れ、徑二三寸の空球を吹き、澎ら加して、風に隨ひ空中に漂搖せしめ、日光

に五彩を放たしめ、意氣頗ぶる揚々たり。泡吹く蟹の、大なるも、日和のどけき水の渚に、静かに安じて吹き出だす者あらぬは、あし。泡の如き地球上に、泡吹くの大ある者は、徐々の勢力をば、徐々として吹き出す者に非らざるをかりしこと、歴史に見るも明かり。今世の人、唯泡の大なることを欲して其急ならんことを願ふ。躁急にして事功を大成するを得ざるは、皆此に坐す。今の政局に、一時怪力を逞うする者は、退てシヤボン玉を吹くを學んで可なり。

◎一世紀の生存

人生に百年の壽ありといふも、今年百以上に達する者、亦往

々にして之れ有り。此等は第十九世紀の百年間を、泡の如く経過せし者に多し。第十八世紀の末年に生れて、第二十世紀に及んで、尙ほ生存す。三世紀をば泡の如き生活の中に電瞥し去りしなり。嘗て白隠禪師の夜船閒話を讀み、白幽仙人ある者が、京都の北白河に隠れ、百年以上の長壽を保ち、其養生法を、石川丈山に授け、又白隠にも之を傳へりといふを見て、當時頗ぶる其荒唐を疑ひしに、今に及んで人間の、養心攝生如何によりて、百歳以上の長壽を保つ、決して難事に非らざるを知りぬ。一世紀間の生存の如きは、未だ必しも長壽とすべからざるを見る。酒を絶ち色を絶ち、學を絶ち智を絶ち、火食を絶ち、肉穀を絶ち、功名富貴を絶ち、不平憂憤を絶ち、隨て凡ての思慮分別、妄想煩

惱を絶ち、精を泄らさず、氣を動かさず、湛然として風なきの水の如く、空虚にして宇宙の万象を容るゝが如くにして、若し百歳以上の長壽を保ち得べくんば、揚子江は當さに、巴蜀に向て流れ去るべからんなり。

◎ 豈に悲まんや

數年前、食は日に一舛米を盡くし、酒亦一飲直ちに一舛を平らげ、自ら健啖と、豪飲とに驚くほどありし。豪奢をば英雄の本色と心得し時さへありき。除夜を花月の歌樓に徹して飲み、松の内を同じく、妓が圍む曲条にもたれ、醉倒して送りし人さへ、今はその人を忘却し、畢りぬ。意氣銷磨とは、自らも認識する所

されど銷磨せし意氣は、一舛米の食、一舛酒の飲及金屏風めぐる曲条よりも、功名の心なき、平和の内に自ら思想の澄靜を覺ゆるに於て、依然銷磨せずして存せり。年少氣銳の徒、豪奢を學ぶ勿く、外に向て求めず、唯々内に向て之を求むるを知るあらば、是れ天の慶なり。意氣銷磨、予豈に自ら悲まんや。内に求めて之を得ば、軌を改むる、亦何の咎かあらん。

◎ 性格の精粗

寒山詩曰ふ、『學文文不就、學武武不成。』文を學び武を學び、兩つあがら成らずして、文武の才、乃ち其融合するを見る。豪奢を好み、遊俠を好み、神仙を好み、危言を好む。而して豪奢を學んで

成らず遊俠を學んで成らず、神仙を學んで成らず、危言を好んで亦成らず。是に於て、人の性格が半ば鍛鍊の罇鑑より、新に型を出づるの刀の如き、一種の異彩を放つを見る。性格に精粗あり、學ぶの時既に成りし如きを覺ゆるは、未だ精ならざるなり。何を學ぶも、其未だ成らざるを覺ゆる、則ち以て粗よりして、精の域に入らんとするを自覺すべし。

◎善くなすあるを

何をあすも、なし得ざるを。なし得ざる者、世に之れあるべき筈なし。空に翔ることも、イムラツク以上の發明をあさば、アビシニヤの外にすら、躍出するを得べからん。水底に潜むも、潜

水器の更に新改良を加へたる者を發明せば、海底旅行をなす容易ならん。天下なし得ざるの事あるべき道理なし。唯々之をなし得るも、善く之をあし得ざるは何人も其無能を耻づべき所。かし得ざる事なきの世に、善くなし得ずといふは、即ち予れ自ら愧つるなきを得ず。幼時より、未だかし得ずと覺えし事、一も之れあらざりき。然るも今に至るも、善くかし得たる者あるを發見し得ず。又現今に於ても、善くかし得べしと信じながら、事實なしたる後に於て、其善くかし得ざりしを發明せざるは、蓋し少なからん。

◎水上の快走

薄暮にして、墨堤より獨り風詠して歸路に上ぼる。吾妻橋下より輪船あるを幸ひに、之に搭載して墨江を下だる。水上を走るの快は、陸上を走るよりも快なり。若し更に陸上に於ける瀟車の如く又自轉車の如く、一層速かなる速力を以て走るを得ば、水上の快は、陸上の快よりも、一層多からん。日斜めに水面を射り、其水面に光ある小波が、絶えず疊み重ねられ、船の舳に、無數の泡沫、鋭き音して、湧くが如くに、瞬時現滅し、大珠小珠、躍出しては没し、没しては躍出する、水神の使、波臣とかいふ者の、我に扈從して、我舟に前驅をあす如き想あらしむ。是れ固より陸上に於ける、車轍の砂塵を飛ばすと、同一に視るべからざる所たり。若し夫れ、佗日、蒸氣力以上の新發明をなし、更に強き速力

を與ふるに足る原動力を應用し得ば、河川に近く住める人類は、凹凸多き陸上を走るの愚をかさいるに至らん。海上の大濤を衝破するは別として、水上の快走船に、新動力を應用するを得ば、揚子江の如き、其他世界のチヅヅケール河川の交通に、快趨なる飛行をなすの神通をかし得るあらん。

◎歳旦の詩大王の風格

元正の詩は、古來頗ぶる多く、魏曹植元會詩以下、六朝隋唐宋元明、亦之れなきはなし。然るも就中、唐の魏徵の詩及元の薩都刺の詩、最も予の愛誦する所あり。魏徵は、奉和正日臨朝詩に於て曰ふ、『百靈侍軒后、萬國會塗山。豈如今濬哲、邁古獨光前。聲教溢

四海朝宗引百川。鏘洋鳴玉佩。灼爍輝金蟬。淑景耀雕輦。高旌揚翠
煙。庭實超王會。廣樂盛鈞天。既欣東日戶。復詠南風篇。願奉光華慶。
從斯萬億年。』たどへ詩の大王の風格あるよりせば、唐太宗の詩
の如きは更に大に見るべきありと雖ども、予の魏徵の詩に取
るは、別に其大理想あるを認めばなり。太宗元日詩に曰ふ『高軒
愛春色。邃閣媚朝光。彤庭飛彩旆。翠幌曜明璫。恭已臨四極。垂衣馭
八荒。霜戟列丹陛。絲竹韻長廊。穆矣熏風茂。康哉帝道昌。繼文遵後
軌。循古鑒前王。草秀故春色。梅豔昔年妝。巨川思欲濟。終以寄舟航。』
又正日臨朝詩に曰ふ『條風開獻節。灰律動初陽。百蠻奉遐晝。萬國
朝未央。雖無舜禹迹。幸欣天地康。車軌同八表。書文混四方。赫奕儼
冠蓋。紛綸盛服章。羽旄飛馳道。鐘鼓震巖廊。組練輝霞色。霜戟曜朝

光。晨宵懷至理。終媿撫遐荒。』若し夫れ、恭已臨四極といひ、晨宵懷
至理といふが如きは、故らに立模の大を装ひ炫ふ者の如きを
覺えらる。魏徵の開口一番、先づ百靈侍軒后、萬國會塗山と筆を
下せしは、遙かに其地步を履むの高きを見るべし。元の薩天錫
は、都門元日詩に曰ふ、『元日都門瑞氣新。層層冠蓋羽林軍。雲邊鷓
立千官曉。天上龍飛萬國春。宮殿日高騰紫霧。簫韶風細入青雲。太
平天子恩如海。亦遣椒觴到小臣。』其天上龍飛、太平天子の二句の
如きは、天錫以前、天錫以後、亦多く見るべからざる所、予の愛誦
して措かざるは、其王風堂々たるあるを以てあり。試みに椒葉
屠蘇の杯を舉げて此詩を誦し見よ、王氣の堂に満ちて、身君主
の前に立つ如きを覺えん。

◎ 一世紀の筆を焚く

元朝には、曉に起きて室を掃ひ、小さきあがらも、門松を植ゑ、
雑煮を供し、杯を舉げて、先づ老親の壽をなし、而して後小庭に
火を熨きて、舊年三百六十日、禿盡せし舊筆を集めて、一束とあ
せしを出し、之を焚盡するを以て家例とす。元朝に筆を焚くは、
予の創例なれど、一年の新なる朝に、舊筆を焼燃し、雲とあして
天に昇ぼらしむるは、筆を重ざるが故なり。今年の元旦は、一世
紀の新元旦なれば、百年間の舊筆を得て、盡く之を焚かざるべ
からず。シルラル、ゲーテ、レッツシング、ダンテ、バイロン、カアライ
ルの舊筆も、悉く集めて之を焚くの筈ありしに、家に百年間、諸

文豪が揮ひし舊筆を集め藏しあらざるは、言ふまでもなく、予
が舊筆とても、三十年來か、二十七八年來の筆をすらも、貯えあ
らざりしととて、僅かに予が幼時始めて字を學びし時の筆と
いふ、其二本の一を取りて之を焚くとせり。キョイニツヒの、
リテラツールゲシヒテ、所載ある、シルラル以下數人の書牘
臨摹を模寫して、之を焚きしも、兒戲の如しとはいへ、我が家例
に依て、一世紀、間文筆者の爲めに、筆の祭をなせし者なりき。奇
を好むには非らずして、我一生の間に、再び世紀の改更に遭遇
するを得るや否やを知るべからざれば、之を我家の歴史に於
ける、一の紀念とあさんが爲めなりき。(明治三十四年正月記)

錦畫雜記

◎病牀の瓶梅

新世紀の第一年を迎ひし、寒き春の初つ方より、病に伏して薬罏經卷、一室の臥牀に、維摩の丈室を臥斷せし枕頭、一枝の瓶梅、寒のまだ明けぬ先きより、一輪二輪笑ひ初めたるは、せめてもの慰めにと、姉なる人の手すさびに活けし一枝ありき。王城の南、御溝の氷はや融けて、柳の絲を縑ぎ初めしと聞けど、病める身の杖引き出づる力もなし。數寄屋橋邊に、馬車の軋りて馳する音のどかある空に立つ砂煙の、茂み隔てに見ゆる色、世は

春の世となれど、梅の一枝予れ病牀に伏すは、抑も何の咎ぞ。病を問ひ來るは、詩者俳者と緇衣の僧とのみ。詫びしきは、一枝の梅に伴つて、日ねもす病牀を守る我身の上なりき。かくて一月より三月まで、病床の人どかりければ、遂に梅花に辜負して、やがて艷陽四月の天とかり、春風駘蕩、櫻花爛熳の頃とはありぬ。陸劔南は、看了梅花睡過春といひたれど、予は病負梅花到治春といふべきとなりぬ。

◎楝の葉

數笏の庭前、一木の楝、雪ふり積みし頃にも、葉の色かへず、空暖かなるにつれ、一葉一葉づゝ、新しき葉の萌え出づるに、跡を

譲りて落ち行く潤葉、狭き庭一面とありて、飯焚く柴の代りに
と掃き取られし後、新らしき葉は、萌黄まばゆく光りて、春の色
はや浅みし、驗しをしめす間もあらず、はや鶯の流れ來りて
其葉の茂みに澁きしば、鳴き習ふ舌の根まだ堅きは、病めるあ
るじの、つれなき夢を呼ぶにやあらん、日の高く上ぼりし後も、
同じ潤葉の茂みに匿れて、まゝならぬ腔を鳴らすは、何を訴へ
んとの爲めにや。やがて梅も咲くべく、櫻も開くべし、かれが世
となるは、遠さにもあらじ、暫らく木の間隠れに潜みて、時を待
てよと、心なき鳥に語り聞かすは、語る者の愚ありけり。楳の葉
が、舊きは去りて新しきが榮ぬ出づるに見れば、天地代謝の理
は、鶯の方とくに承知せしを、ゑるべかりしか。

◎梅花の貧相

梅花を罵るにはあらねど、其瘦せたる姿、清しといへばさも
あらん。されど其花の小にして、瓣の薄きより、花振りの圭角多
くして鋭く、たゞ疎影淡香の、冷かに艶ある所、富貴福德の相に
はあらず。仙骨ある者は、貧相也。貧相ありとて野鄙也といふに
はあらず。氣高き所は、仙骨の在る所あれども、其仙骨の在る所
が、貧相の在る所也。若し此貧相を憐むは、其清く癯たる所に在
りといふからは、是れ梅に對する、世の詩人歌人等が同情の在
る所にて、かゝる同情を寄する人は、皆な同じ缺点を有する人
あるや明也。弱き者、不運なる人、不平ある人、此等の人、梅花に

對して、最も多く同情を有する人あるべし。病める予の、梅花に同情を寄せ、又梅花の同情を求むると、殊に強きを覚えしは、此等の爲めにもあらん。世にたゞ自己の清きを、梅花によせて誇らんとする愚人こそ、梅花に取りて迷惑のとなれ。富貴にして淫せず、貧賤に素して屈せざるやうからでは、梅花に同情は寄せらるべきも、梅花の同情を求め得べからざるべし。梅花を貧相也といふとも、其貧にして清き所が、其美德とす可きのみ。

◎春野の摘草

近隣なる若者等、王城の東門ある、後は大厦高樓の並ぶべき今の空地が、原野なせるに、春草あまた萌え出でたりと覺しく

我れ先きと争ふて、護膜毬の投げ遊び、自轉車の駆け合に倦みてか、その野を指して、散歩に趣きし跡より、そが妹子等の、手鞠遊びや、雛遊びをあししも、同じくそれに往きて摘草せばやと語り合ふを聞けり。蒲公英、堇も咲き出でつらん、五形、連翹も咲きしくらん、山の手の畑には、葎莖も出でん、病める身の、野の末に歩みて、春の神の來り給ふを迎へん術なかりしは、惜しきとなりき。母なる人が、半日の慰みに、籃一杯に摘みまし、よめ菜とやら、今の膳に上ぼりし時の喜び、心弱はく優にやさしく、自から覺ゆるは、病める時の常也とか。

◎朝陽櫻花の圖

去ぬる年、南の果てなる高砂の島に遊びて還るさ、友なる繪
人がものし贈りし、朝陽櫻花の圖、まだ裝潢はせざれど、春のや
うく、のどかにありし今も、春野に櫻狩する術なき身にしあ
れば、せめても之を壁に貼り付け、朝夕の眺めにせばやと、取り
出さしめて、そを掲げぬ。朝日に匂ふ山櫻、空しき小座敷、俄かに
光を添へて、爛熳たる天葩、花脣を動かして語らんとするさま
也、繪としては餘り華美に過ぎたれど、淋しく澁きよりは、病を
慰むるには、あよなき圖がらなりしと覺えぬ。物數奇ある歌人
は、旭日に匂ふ山櫻をば、敷島の大和心とかに比しくらべはし
たれど、そは餘りに心弱からずや。疾風怒雨に、敢へなく散るを
如何に見るべき。

◎花籠

病もやゝ輕うなりたれば、櫻狩に赴かばやと思ひしも、それ
ほどによくもあらず、しからばとて野の花摘みて花束つくら
んは、煩はし。造花を買ひ求めて、花籠つくらんと思ひ立ち、暖か
なる夕、姉ある人に導かれて、銀座通なる、とある西洋小間物店
の前を過ぎりぬ。うつくしくあざやかなる造り花、玻璃の戸外
より、透かし見れば、燃ゆる如き紫、蒸し立つばかりの紅、萌黄、電
灯に輝やきて、艶を添えおたれば、空しく過ぎ去るも本意から
ずと、入りて其花を見ぬ。菫や薔薇や、其他色々の珍らしき、西洋
の造り花、皆巴黎製のしるしを着けて、麗はしさえも言はれず、

價を問へば、あまりに高價也。よくは出来たれどその花五つ六つ集めて、十幾金を投ずるとも花籠は造くり得ざるべしと分別を立て其儘去りて、日本製の造花など賣る店に就き牡丹や芍薬其他くさくさの造り花を購ひ求めて、それを花籠に集めやがてその花籠を病養ふ室の床飾りとしぬ、されど西洋より來し造り花の麗はしさは、今にも忘れやらす、日本の造花がかくも奇麗に出来上がる、其日も遠からずとて其儘にしぬ。

◎凌雲閣の花見

友に奇を好む者あり、一目の下に、大江戸の凡ての櫻を眺め盡くさんどて、淺草の十二階へはるく上ぼりに行きしがあ

りき。其人訪ひ來りて『まあと花見は十二階に限ると也。下界の雜沓には少しも妨げられず、上野淺草向島の花、さては飛鳥山をも見たるらし、滿都の花一目の下に歸して、身は塵や埃の外に在り。心地よきと言ふべからず』と語れり。それはさるあらんよき考にあそ、地に匍ひて、花を仰ぎ見るより天上に在りて、俯して花見をするは、いと賢こきわざ也、予もいつかは、その十二階に上りて、下界の花見をせんものと思ひしが遂にその志を果さざりき。

◎花見舟

舟に幕張り、さまざまの旗など立て、鼓大鼓や笛の囃しをあ

し、兩國橋下の河岸より、歌女あどあまた載せて、墨田の花見に赴むく舟、其他屋根舟に同じく歌女を載せて上流り行く者、引きも切れず、賑はしきは花見也。江戸の繁昌とは、花見と花火と也とは聞きつれど、花見の方は殊の外賑やか也。墨田の花をば、いかでかくも甚しくもてはやしぬるか、心得ぬ風俗也。舟の舳に、舞子が汐汲やあんかの舞ををし、扇の影、袖の影、紛披して流に落つるさま、賑はしき中に、又興ありけり。絲竹の聲の劇けしく舟に起りて、其響に花も飛びあふ、かくも都人に騒ぎ立てらるゝ、櫻の神や、却つてをかしさには堪えざるべし。花見の舟は、數も多し。されど錦帆天子の鷓首を浮ぶるも見えざれば、花見に上下貴賤の別なしと、古へより定められしも、やはり豪奢は

貧者の興からざる所、花見がその豪奢を炫ふ、一年の晴場とあり、花見船が、其舞臺となりしも、今に始まりし者には非らず。

◎花見の道化

櫻咲いて満都の人、悉く狂するが如く思ひくゝの打粉にて、鬘や面や、衣裳の身成りに、色々の意匠を凝らし、奇を極はめ珍らしきを争ふは、花見の客の常とあそ。去ぬる年、下谷なる廣徳寺の禪房に僦居してありしが、門前あまりの雑沓に、ふと出て見れば、恰かも狐の嫁入の道中が通る時ありき。幾人となく揃ひの衣裳に、練星の玉を模様とあし、狐の面、狐の尾にて練り行くさま、おかしさえも言はれず。次ぎに來りしは、七ツ道具を肩

にさし掛けし、辨慶なりき、次ぎには、太き緋縮緬を縫ひたる胸緒を結んで、鬼ヶ島退治の朝比奈が來り、先きの辨慶と、何かお口論を始め、遂に寺の門前ある更番にて説諭を加へられしほど、世におかしきとはあらざるべきか、嘗つては谷中に草庵を結び居りしとき、花見寺の戻りの客か、門を引き明け玄關に立ちて、酔醒の水を求むる者あり、起ち出で見れば、加藤清正の装束したる男ありき、加藤清正が酔醒の水を人の家に求むるとは、滑稽の極なりき。續いてお半長右衛門、梅川忠兵衛なんどの、門前を通りしもありき、其後は雜沓を避けて、夜か曉あらでは、花見に出でざれば、お道化を見しともあらざりしかど、大抵は此の位な狂戲の沙汰なるべし

◎暮春の移居

咲き亂れたる櫻、墨田の岸に白う雪を敷き、お道化の遊人やうやく來らずありて、墨田の川は、何となう淋しくありし頃、牡丹もはや色褪せたり、藤の花今を盛りと聞くさへ遅しとて、かねてより心掛け置きたる、墨田の西河岸、橋場の河岸に、暫し住むべき庵を得たれば、よき日を撰んで、移居の用意をおしぬ。數寄屋橋側まで、舟の來べきを幸ひに、簞笥、小簞笥、書籍、衣具、函、一切の家具、一切の道具、竈や釜や鍋まで、悉く二艘の舟に載み込み、數寄屋河岸より京橋に出で、三十間堀より、靈岸島を漕ぎ行き、大川より、瀛船の引舟をおさしめ、永代、大橋、兩國、厩橋、吾妻橋

を経て、墨田の川をば、更に漁船に引かれて、橋場の河岸、水門近く舟を繋ぎて、始めて江上の人となりぬ。陸上の轉宅は、是れまで幾たびもなしたれど、水上船にて一家族ぐるみ、家具諸道具もろともに移り越せしは、是れが始めて也。花菖蒲はや咲き初めぬといふ頃、最早や春にはあらで、間もかく行く春の名残をば、墨田の土手の葉櫻に惜しみて、日もすがら江の小波を打ち眺め、浮きつ沈みつ泳ぎ來る、鷗の背にさす夕日の、西に落つるの早きをかまち、都大路に用あきひま人、たゞ坐して波の光に、手に仕かせて書棚の巻を引き出し、それを倦みてはふと立ち出で、橋場田甫より、汐入に歩み、渡しを越へて綾瀬より、墨田の土手を徜徉する外、世に用あき我儘者を容るべき天地はなき筈

也。若葉青葉に春暮れて予れ渚上に在り。春の行衛を、水の流に見れど痕なし。(三十四年春所記)

梅下偶語

◎梅花の同情

梅花は、最早や咲きつらん。江上の水鳥、水の暖かなるを知りて、梅の咲くべきのどかさとありぬ。さては文人墨客とやら、詩人歌人とやらが、さまざまの句をもつする、推敲投げ首の時節も、來りしよあ。かくも梅花をめでたく思ふ、世の習こそ、いみじういぶかしきとのけはみなれ。梅花に對する同情と、いはいふものゝ、是れは己れの清きを、之れにことよせて、自ら高ぶり誇る位のと也。清きを梅の姿とせしは、たれ定めけん。いまは清

き花といへば、先づ梅のとはせらるゝ也

病める者、窮せる者、弱き者、是れ等は皆同情に富み、又最も多同同情を惹く。足らはぬふし多きに、いつも同情は成り立つ也。梅花に同情を寄せ、清きを之れによりて誇らんとは、清からぬ人の、清きを羨むが故也。清きを羨むほどの心なき、濁りし人は、いはずもがな。若し清き度に於て、梅よりも清しとせんには、梅花をめぐればとて、めでざればとて、清きと清からざるとに、何んの増減もなかるべし。予は彼の梅をめで、梅よりも清き人たるを得ざる者を憐む。詩人とか、歌人とか、たゞ濫き真似をして、しきりに梅の清きを己れに比し、たゞ自ら誇るの外を知らぬ俗物の、古より世に多きを、うらみとす。梅もし靈あらば、かゝ

る同情を寄せらるゝをば、あまりに人を愚にする、侮辱とこそ
は覺ゆべけれ。清きを誇りて清からぬ世は、今も古も同じと也

◎梅花と菅公

奇を好むの甚しいかな。梅花をば菅公遺愛の花ありとして
か、今は菅公をば、梅花の神とするやうにありぬ。西湖の孤山に
棲みし、宋の林和靖をば、唐渡りの天神とさへ心得て、古よりさ
まゝの繪像さへ傳はりぬ、大宰府の飛梅、是れも天神の威靈
によるとのと也。さても奇を好む人情ほど、無意義ある者はな
きぞ。

文學の神、學の神、秀てたる人を崇拜するは、美德とはいふべ

き者の、崇拜のあまりに出で、何事も神奇にせらるゝは、迷信
多き時代のとなりとするも、神人時代とかの、原始人ならば兎
も角も、僅か一千年以前の人をかゝる迷信の中心とするは、心
えがたきと也。

菅公を梅花の神とするは、なほ恕す可し。さては菅公が、文學
の神とせらるゝまゝに梅花をば、文學に缺く可らざる神とし
て、たゞ道理もなしに、梅花をもてはやすは、地下菅公のをかし
さに堪へぬとなる可し。彼の時代に、最も早へ海外の文化に目
を附けし丈けありて、支那より渡來の梅も、支那文學と共にめ
でらるゝに至りしとせば、此の後一千年も経たらんには、泰西
文學の秀てたる人、何か世の同情を惹く可き境遇に死して、

莖や薔薇やの神とせらるゝも、あり得べきといふべしや。蓮を菩提の花とかいふは、印度に此花以外の花らしき者なきより、常に經典に比較に出だされたれば也。人類の好奇心ほど、無意義にして、思ひかけなき勢力を有する者は、世にまたとなかる可し。

◎華嚴の研究

美學とかいふ語は、十九世紀の末に起りて、それより美の假象とか、美の具体とか、美の理想とかいふとも、人の口に膾炙せらるゝとなりしかど、理屈をいふ者のみにて、彼の美ある者が、文藝美術の上に、大なる連續をなして、現世にいまだ、人の手

によりて現はし出されざるはいかにや。

世界いづれの國にも、美術文藝の遺物は多けれど、理想美を具体にして、一時代一邦國の美的觀念を、一大組織に編制したるは、罕れ也。建築、彫刻、繪畫などにては、古き時代の、美的組織を一部分だけ、今に傳うるはあれど、皆完備の物にはあらず、獨り印度の或る時代に於ける、理想美だけは、華嚴の經典に依りて、一大伽藍をあしなから、今に傳へらるゝ也。原文の梵經は、得べからずとも、漢譯の經は、藏經中の主要部を占むる也。希臘、羅馬以來、泰西になかりし者が、今亞細亞の一角に、幾千年の後、尙ほ其假象といふか、具体といふか、いづれにしても、傳へられ居るは、事實也。泰西の學者が、此珍らしき印度の遺物によりて、古代

印度の一大美的組織を窺ひ知らんと念を起す日も、遠きにはあらず。華學とか、美術とか、美文とかを、彼此いふ人にて、まだ華嚴の何たるをも知らざる如きは、甚だしき手落ちとあそいふべけれ、泰西人の手を着けぬ先きに、此宇宙に罕有なる、一大美的連續を研究して、美の假象、美の具体、美の理想とかの、更に一大連續をなせる、一個の全体を窺ふ丈には、理論よりも有益のたと信ぜらる。

◎華嚴の繪卷

古代印度の、一大美的連續を、幾部かの經典にせし者は、華嚴也。泰西學者は、僅かに其名を聞いて、未だ其書を見ざるも多か

らん。よし其書を見ればとて、其書を読み得るは、罕れあらん。まして之を研究するなどは、今の時に思ひもよらぬとなる可し。されど既に世界古今に比類なき、特殊の一經典ありとせば、必らず早晚先見ある學者の研究に上ぼさるゝは、明白のこと也。支那の學者中には古來往々にして、華嚴を研究せし者は、之れありしも、皆系統なき研究にして、有益なる貢獻をなすには及ばざりき。

墨田の川を隔て、住める友に、結城素明氏といふ繪畫の研究者あり。夙に華嚴の研究すべきを思ひ、さて其思を凝したる一枝五色の筆もて、華嚴世界として組み立てらるゝ、彼の一大美的連續をば、一の繪卷物に描き出さんとの志、今に牢として

抜く可らず、其が大成の日は、一朝一夕に非らざる可きも、若し是れにして成らば、確かに宇宙の一裝飾として、永久に傳ふべき者也。されどそは、畢生の大事業也。あらゆる美麗莊嚴、いかに一枝の筆にて描き出すべきか。無數珍寶の連續、之れを資料として、宇宙の空間に一大建築物を建つるは、天にのぼるよりも難かる可し。さはあれ、苟くも美の研究といふ以上は、かゝる大望を抱いてゐる、始めて天下に、古今に抜ける一大絶品を出し得べきあれ、米國には、既に釋迦一代記を、繪畫にするの企てをさへなし、今日なれば、華嚴の繪卷は、是非に着手せらる可き者たる也。

◎月宮殿の繪畫

五六年前、越後に在りし時、中蒲原の素封家、畠山氏に招かれしとあり、當時氏の樓上に、一の中形の扁額ありしを記憶せり。筆者の清暉なりしか、將た何人なりしかは、今想ひ出さざれど、何にしる文淋時代の人なりしと覺ゆ、畫は、月宮殿をものしゝなりき。是れは古來より、月球に關する傳説の最も主たる者を資料として、一の理想畫を構成せし者ありき。あまりに珍らしき圖案とはいふべからざれど、是れは詩繪の下繪、友染の下繪あどの如き、平凡ある繪畫にはあらずして、確かに理想畫として、成功せし者ありしやうに覺え居る也。文淋時代の畫としては

蓋し罕有の者か。

横に長き長方形の紙の真中に、徑一尺ばかりの圓形を描き其圓周外は、金粉を交へたる紫紺色の雲や、赤味帯びたる雲をも取り交せて、之れを棚引かし、其采色の既に、嶄新ありしのみならず、其圓内に描がれたる、月宮殿の建築の如き、樓閣臺榭の排置、物象の遠近、色彩の濃淡配置、皆善く人に美感を與へぬ故事に依りし痕跡はあれど、そはたゞ建築法を、支那風と印度風との折衷したる所に見るべきのみにて、其他は桂の樹を添えたるのみ、頗ぶる密畫なりしと覺えしも、材料は極めて單簡にして、素蛾十數人の舞へるを、殊更に畫かず、たゞ一見人をして是れ嫦娥の居也と思惟せしむるに止め、銀の蟾、玉の兔の如

きは、一も畫かず、皆人をして此等の故事を連想せしむるに一任して、敢て蛇足を添えず。是れは月宮殿の畫としては、蓋し一傑作と見るべきやう今に覺ゆる也。

◎氷山の衝撃

東察か、アラスカ當りへ、海獵に赴いて還りし人の話によれば、北氷洋近くある海面には、常に巨大山の如き氷塊の流るゝありて、危険道ふべからずとのと也。是れはリイダアを讀みし時代にも、屢々讀み知りし所あるが、其氷塊の衝撃するさまは、ただ耳新らしく感じたり。海洋には、海面の潮流と、海底の潮流とは、逆さに流るゝ者にて、寒潮は海底より南下し、暖潮は表

面に沿ふて北上するが爲め、高さ何百尺といふ、大氷塊の根は深く海底の潮流に流がさるゝが故に、全く表面の潮流と、反對に逆つて進行し來る也。小なる幾十尺といふ氷塊は、單に表面の潮に沿うて流るゝが故に大氷塊と全く逆つて流るゝとなる也。大氷塊は南下し、小氷塊は北上し、屹立せる冰山、兩方より相逼まり來つて、茲に大衝擊を起し、大氷塊の一部分は、爲めに缺け落ち、小氷塊は、粉碎に歸し、潮流爲めに大混乱を來して、寒濤天を蹴り、快道ふべからざれど、其危きこと累卵も啗ならず、船長水夫は、必死にありて此危険を避けんとし、他を顧みるに違はあらざれど、船中より此奇異の壯觀を見ん者は、何人も快哉を叫ばざるを得ざる可しと。天体の衝擊は地球上に在

りては、容易に見る可らざる所あれど、山と山との衝突は、かくて冰山亦がらも、北氷洋邊には之を見る可き也。山岳の衝突、其粉碎、是れは確かに地球上の一大偉觀たるに相違あからん、山なす大浪の海上に二つ相衝擊するさへ、尙ほ驚心悸魂すべきに山の衝突、それいかばかりか奇異なるべきぞ。

◎凍死と火定

青森の八甲田山に、二百何十人の軍隊凍死ありしとて、繪カバンを急ぎ用意して、視察に赴きし、河向ひの結城氏、凍傷者の病室にあるを繪にし、スケッチを取つて歸り、語り云ふ、八甲田山に雪を踏んで、凍死者の状を目撃せしに、多くは皆安眠し

あがら死に就きし如く、いとやすくと死し居りしを見たりと、又蘇生せし士官の話によるも、凍えたる身体、意の如くならず、疲れに疲れて、其儘人事不省とあり、苦痛をば、別に感ぜざりしといひ居りたりとのと也。たゞ憐むべきは、手足を切斷せられたる、徳利同様の凍傷者、是れは寧しろ死せる方よかりしとて、さめくと啼き居たり。繃帯の解き換へあど、苦痛に堪へず一層殺して呉れと叫ぶ者すらあり。悲惨は却つて、生存者の身の上になりとの物語りなりき、されば凍死は、至極心地善く死に切れる者と思はる。若し之を古へにありし火定に入りし者に比せば、そはいと心安きとある可し。昔し泰西の哲學者に火山の噴火口に飛び込みし者ありと聞けり。又エトナ噴火山の

破裂の時、山下兵營の兵士が、噴火の灰に埋没せられて死せしを聞けり。我邦にては、八百屋阿七の火刑は、何人も知る所、彼の織田氏に圍まれし、甲州惠林寺の和尚が、火を着けられて従容として動かず、『滅却心頭火亦涼』と、最後の偈を拈じて、大衆と共に火定に入りて、焼け死せしは、慘酷あるとどもなりき。火に焼かるゝに比しあば、慘は慘あれど、凍死は寧しろ甚だ心安きことあらん。

◎極寒夜と極炎天

極寒夜と、極炎天とは、神聖也。サブライムといふは、此時に見る可し。寒き威力が、凡べての動物を、縮み匿れしめて、草木山河

皆瘦せに瘦せ、空濶ある世界を、意に任かせて命令す。唯服従あるのみ、決して反抗するを得ず。反抗せば、其れたゞ背後目前に、凍死の一事あらんのみ。酷炎の真晝中、亦之れに同じき者あり。暑き光線の矢は、直ちに地上を射りて、人間悉く物影を求めて匍ひ行く。上に儼然として、威力の命令あり、下にたゞ潜伏の服従あるのみ。反抗する者なし、故に混乱はあらず。混乱なし、故に整然たり。是れ殊にサブライムを感ずる所以也。

凡べて夜は、意思、知識、判断、理論、陰謀、労働の休める時なれば、極寒夜ならずとも、たゞ一枚の暗黒、神聖に非らずとはせず。されど之を極寒夜の、如何なる強き意志をも盡せしめ、如何なる巧みなる陰謀をも中止せしむる丈けは、其一層サブライムな

る所以とせん。白晝は動くの時也。されど極炎の日中には、獅子を搏つサンダウの強力も、世界を買ふに足る程黄金を積めるカルチギアの金力も共に施さすの術なき時也。日の傾くを待つて種々の群動は始まりんも、日の正さに中するの時は是れ方さに人力を以て、又凡て動物の力を以て抵抗す可き時に非ず。凜然たる威力の命令、反抗す可からざる地上の服従、此間に善なく悪なく、唯世界の神聖あるを見んのみ。予故に最も酷寒夜と極炎天とを好む。人情に非すといふも、其神聖なるを好む也。

◎完全は之を思む可し

昔しさる明細ある工匠ありて、墨繩の附けやう、こよなく緻密にて、一点の透き間もなかりしかば、建、物出来上りて、四五人の工匠仲間と、其一間に泊り、寒き頃のととて、板戸も凡べて閉ざして、節穴一つ、戸隙一つなかりしより、宵の内に大桶の炭を煽りて、暖を取り置きし、其炭より出でし瓦斯に中りてや、泊りし四五人の工匠共に、皆な窒息して死せりといへり。あまり明細に、寸分厘毛の違ひなきやうに建てたれば、かくは自ら禍を招きし也。

されば古より、大工事の建物には、必らず完全無缺あるを避け、鬼門とかいふ箇所、に、多少の手抜きをなし、かゝる災を避けしとか。平安城の北の角、日光廟の鬼門除けなどは、皆此の類な

る可し。繪をかく人も、文や詩を作くる人も、此点よりいへば、必らず完全無缺を避く可きとなるべしや。少しの瑕あるとあるに、面白味のある者なるを、それを完全にものせんとせば、かへつて其面白味を失ふべし。さなくとも、眞の完全は、とても企て及ぶべきにもあらず、又完全にものせんとせば、一生を擧げて此事にのみ従ふとも、それは出来得ぬものありかし。極度に達せぬところが、肝心也。高妙の家には、鬼其室を窺ふともいへり。されば瑕多き物をさへ、こしらえ居れば、禍なきと知るべき也。瑕のあまりに多きやうにては、是れも悪しかる可きも、たゞ一二の瑕ある所が、凡べて、苦心の痕と見る可し。達人の完全を忌むは、かゝる處にやありなん。

◎林中の獅子吼

寒の明けしと覺ゆる頃、夕方より上野の律院に所用あり、ふと車をそれへ廻はせて、動物園のあたりを過ぎぬ。空木の櫻はまだ木の芽吹きやらねど、萌ゆる氣はや充ちくく、木の梢には、すべて灰色の白味を帯び、それに傾ける夕日のさして、白き紫の色をなしぬ。人の影一つ見えねば何となく物淋しくて、深山幽谷の中をたどる心地、其寂寞の静さは、乍ち動物園の獅子吼の爲めに、破られて、象の鳴き聲さへ、つゞいて起りぬ。他のもろくくの鳥や獸は、皆屏息して聲もなかりしが、獅子吼えずなりて、やがて一時に鳴き出しぬ。鵝鳥の聲、猿の聲などは、其中に最も

あらはに聞き得られき。印度當りの山林をたどり行くの心地せられしは、獅子と象との鳴き聲の爲めなりしが、かく猿の叫ぶを聞けば、是れは四川の峽門に入りし如き心地、いづれにしても、大陸の山林を行く時の偲ばれて、限りなき感を起しぬ。

◎船頭の喧嘩

玻璃窓の外に、江の夕暮をつくねんと眺め居るとき、上る船と、下る船との船頭が、岸のみをつくしに、棹のつき所を争ふて舷と舷と摺り違がへ、さてはさまくくの悪口雑言を吐き合ひしが、罵じる聲の高きのみにて、船と船とは、上と下とへ次第次第に遠くかりぬ。遠くあるに随ひ罵り合へる聲は、雙方共に高

くなり、側へに聞き居る者には、素破や組打ちか、打ち合ひかを
始めしやと思はしむるほどありしも、たゞ罵る聲の烈しきの
みにて、船と船とは、互に上下に漕ぎ去りけり。陸上の喧嘩から
ば、かほどに悪口のいひ合ひするまでもなきとあらんも、船と
船とのとなれば、組打、打合もできずて、かくは口のみにて、いひ
得る限りの悪口を盡くすにやあらん。船頭の喧嘩ほど、間の扱
けたるはあらじな。されば船頭する人の、口の荒らきは、かゝる
口喧嘩の必要より起りし者なりしか。

◎水鳥

俳諧には、水鳥を冬の季に入れしは、うべあり。冬枯の頃より

寒にかけ、都鳥の窓先なる江の流に遊び居るは、他の時季よ
りも多かりしに、春立ち初めて寒は明け、水のやうやく暖かに
ぬるむ頃に、さほ數多なる水鳥が、浮きつ沈みつ泳ぎ居るを見
たり。されば水鳥は、冬の季にするよりも、初春の季に入るべき
者にや。春夏、夏秋の交よりも、冬春の交に多しといふあらば、や
はり冬の季とすべきか。されど冷たき雨のふらぬ時、又はあま
り日の照らぬ時あらでは、水鳥の泳ぐ數の多からぬは、いかに
や。雨と晴とを嫌ひて、たゞ曇りたる静けき空を好む者にや。此
等はいぶかしきふし也。

◎雨中の棹歌

はや春雨の煙の如きが、向ふ河岸を蹴ろにして、其下通ふ船もかすかに見ゆるばかり、煙むれる雨の中を、棹歌高らかにうたひ行くは、却つて晴れし日より、近う聞ゆる也。濕めりし空気に、音聲はよく傳達する者とかや。

◎銀の圓板

空澄み渡る夕べ、二月の二十二日は、舊の一月十五日夕に當りて、月しづかに東の河岸にのぼり來りぬ。初は銀の細長き柱を、水面に描き、向ふ河岸より、あちの岸に渡りし者、やゝ高うなりて、銀の鱗を、徑六尺許の圓板に鏤ばみたる、其鱗形がキラ／＼と動いて、かくの如き者、二尺許離れて、東より西へ、二つ三つ並

べられ、順次に小形とありて、はてはたゞ銀の柱の水にゆられて、波動をなし居るのみありき。かゝる美ある象眼も、蒔繪も、これは人工の凡べての術にて造り得べきとかは、天然の美の、不可思議あるは、かゝる處にも、其秘密を知る可き也。此奇異なる、水と月との幻象は、十五夕よりも、十六夕に至りて、益あざやかに江の面に浮み出でしを見たり。是れはいづれの季節の月にてても、同様に、十五夜には、まだ夕陽の反射光線が、幾分か大空を照らし居る頃に、はや月ののぼり來るが爲めに、十六夜には、日全く落ち盡きて、夜の闇黒が、全然世界を支配したる後に、しづしづと月の上り來るが故也。春の初より中ばにかけ、又秋の初より、其半ばに渡りて、江上の水も、大汐がさして水漫々たるさ

ま、他の季節より嵩み居れば、水と月との幻象も、殊更らにあざやかにいちゝるしきを見たるなりき。昔より月と水との相照映したるさまを、繪にもし詩にもしたるは、あまたあれど、かゝる奇異の幻象を寫し出したるは、あらず。かゝる幻象は、是れまで人の之を見る者なかりしにや。はた之を見しともたゞ驚歎するばかりにて、寫しやうのなかりしにや。

◎黒綾天鷲絨

墨田隄の、まだ茅吹かぬ、薄黒き空木の、櫻並木の東よりして、十七夜二月十四日の月、空に赤らみ出でし頃、淺茅が原を横切りて、橋場田圃の野路をくねりつ、石濱明神の、古るく寂びたる森の

外より汐入村近く、田圃路の散策に、崩づれし畝を傳ひ、ほのぐらき月影をたよりて、行けどもく、盡させぬ野路、とある村路に出で、やゝ廣き路なるまゝに、足にまかせて、汐入の村さして行きぬ。田圃をば薄暗き中に透かし見れば、枯れ苗は、規則正しく、黒鷲色の暗き田面に、去年より残されて、整列をなし、水は涸れたれど、なほ少し濡めりを帯び、其上を月さやかに照らして、艶の光りを添へ、一面に黒綾の天鷲絨線などの、大なる敷物を敷き擴げし如く、其間を遙送りて、縫へる野路、まだ草もえ出でず、霜の跡さへ今は乾いて、唯白うなれる、細長き帯、其上を踏み行く雪踏の音、物音一つなき寂寞を破りて、赤楊の野川近く、並び立つあたり、反響をなして、予を迎へて、此妙へ

ある夜景を語らんとする、人々來つらんと、月影に透かし見れどもそれさへ分かず。予が踏み行く雪踏の反響と、心付きしとき、ははや其赤楊のむら立てる、野川の岸に來りて、水に細かに月の碎くるをうつし見る、月天心に近き頃なりき。はや春の夜とありけん、暖かければ、外套も着ず、袴巻もせず、面を吹いて寒からず、楊柳の風といふ心地、ふりかへり見れば、千住停車場の構内に、幾點の電燈、青う光りて、鐵道にさしる車の音さへ聞えず、夜もふけたらんとて、引返へし來ぬ。

◎籠花立の椿

藤蔓編みて造くりし、花籠のさやかあるに、活けて春の暖さ

の増し行く、驗しとせばやと、姉なる人の手すさびの椿、昨日の朝に一輪開き、今朝また一輪咲きて、明朝にも開かん、蒼、二つ三つ、空もやうく、のどけくなりしまゝに、風もぬるみて、江東の梅もはや咲き初めたらん。去年の秋の七草枯れし頃より、久しく人の足跡とたえし墨田堤も、俄かに遊人の履を鳴らして集まり來る、梅見、花見の時も近うありしと覺えられ、花見舟のあつらひ向きにせはしき、船大工の鉦の響鋭く、さては三井、大丸、白木屋あたり、春衣の注文も多かるべく、さらばとて去年の春着の垢を洗濯して、貯なき身の花咲くときを待つ、の外なき、空の明るくあるを、却つて仇とや思ひそ。床活けの椿、はや二輪、咲き笑みたれど、墨田隄の、木々の梢も、今は何とあう赤味を帯び

て、萌え初めんとするさま、もはや椿のさかゆる世にはあらじな。梅咲き、櫻さき、桃さき、木蘭さき、牡丹、芍薬、藤の花、千紫万紅の春の繪巻は、あれよりぞ。二輪、三輪の椿、なれが寒より咲き初めて、梅に先だち散り行く此日、せめて歌の一首、なれが名残とやせん。その歌さへも誰れに示めさん。春の日病になやむ友あり此のどかなる日を、枕そばだていかに見つらん。駒込のあたり木々の芽吹くべき、梅咲きぬべし。その歌よせて慰めんと、したゝめたれど、かへりて病の妨げともなるべしとて、打ち棄てぬ。窓明け放ち置きしまし、風は机をさらへ去り、歌かきし紙、江に落ちて流れ行きけり。

◎造花の櫻

さる貧しき少女ありて、暖かき日を、日ねもす雷神門の、人馬往きかふ、大路のかたへに、細き聲して賣り居りしといふ、造花の櫻、二枝、三枝、『往來の人は、誰れ一人、ふりかへり見て、そを買ひ求むる者もあきに、憐れみの心たへざりければ、二枝三枝、買ひ取りて來し也』とて、小笠原島の友より、土産に贈られし、珍らしき木の筆立て、それに挿し置きしは、姉ある人のあさけ也とか。その造くり方は、巧みならねど、おほ櫻は櫻也。手弱き乙女の、賣り居りしといふ櫻あれば、其やさしき乙女の紀念として、そのまゝ、部室の一隅に置き、山櫻の咲き出づるまでの眺めにせば

やとて、そのまま、筆筒に立て置きぬ。

◎魚三昧

のどかに暖かなる日、つれづれの餘に、詩集などあさり居りしが、圖らずも音つれられしは、向ひ河岸の露伴うしと、其つれなりし人、さまざまの話に、日の暮るゝも覺えず、くつろげて興に入り、さて例によりて釣の話なども始りぬ。つれなる人が『釣も上乘に至れば、魚を忘るゝといへば、魚の釣れる釣れぬは、問ふ所にあらざるべし』といへば、うしはすかさず『天地是れ魚、魚の外、一物なし。是れ釣の大乗也。初のほどは、体屈のともあらんと、釣舟に酒や重箱を用意しては出掛けたれど、段々にそれが

うるさくありて、はてはたゞ、飢を充たす丈けの握飯にて満足し、唯魚を釣る外、何の考へもあくなりぬ。魚三昧といへば、此等のとちらん』と語りぬ。魚三昧とは、いみじう味ある言葉と覺えしまし、その話をかくはかいつけおきぬ。

◎將棋の難關

話はいつのまにか、將棋のことに及びぬ。『大分獨學を積みしととて、自ら天下に敵なからんと、得意がつてゐる所へ、さる人の紹介にて、小野五平といふ、天下一の名手と手合せするととなりしが、小野氏は、年長けたる老人にて是れまで何づれの人かと打ちしとありやとの問ひに、之れなしと答へたれば、然らば

とて直様に、盤のはしの方から、一枚二枚と靜かに駒を取り始めて、都合六枚を卸ろしたり。此爺は人を侮るにほどもあらん六枚外づしと指す法位を知らぬと心得居るかと思ひ、憤懣に堪へず、滿腹に焚ゆるが如き怒氣を、靜かに押へて、さて指し始めたれば、さては少しは御存知と見えるとの冷かなる挨拶、かゝる毒語を放たれ、怒氣最早や抑えきれぬを、強おて抑へて、指しつゝけたるに、少しにても拙なき指し手を出せば、そんな駒は、裏切りの駒と申し、却つて敵の爲めになる駒也とどいひて、中々透き間も見せざれば、遂に敗北となりたり、それより更に將棋を究めんと、の念を起まして、凝りかたまりたり。月に六回の稽古を、其小野氏によりて指し貰ひ居りしが、其間に氏も六

枚にては骨の折れるやうにありしとのとなりき。それより二箇月を費やして四枚卸ろしとなり、其後は中々に上達せず、其内に氏の近邊より移居して、遠く墨田の上に住むとどありしより、將棋を中止したりしが、氏の話によれば、是れより上は、中々の難關にて、二箇月や、三箇月では、進歩も見えぬ程也。四枚目が、第一の難關にて、二枚目が、第二の難關、それより先きは、兩々相對し、互ひに敵對となるとなれば、これは稽古にはあらずして互格の戦となる也。此時に至らば、師匠の力は、やはり上にありて、中々敵すべくもあらず。是れが第三の最後の難關也といへり。是れ露伴うしの語る所也。聞く禪の公案にも、法身機觀、理觀、難透難解、重々禁等、工夫の階梯ありて、難透難解、重々禁は、其

難關とせらるゝ由、此等は、何事によらず奥妙を極むるに、必らず出逢ふべき難關と云そ覺ゆれ。

◎愚の上乗

『雪の降りし日、舟を中川の鐵橋の下へ漕ぎ行き、それに釣をなせしも、更に獲物もあらず、手の甲は眞赤になりて、凍え痛み始めたれば、かゝる日に永居も氣がきかず、早く還りて酒でも飲まんものと、家に還れば、家人は出迎へ、今日はいたく寒き日ありし、魚も定めて出てざりしならんとの冷かなる言ひ艸、かく罵られては、始めて釣に凝りたる己れの愚を知りたれど、思へば還らんとて、舟漕ぎ返へせし頃尚ほ泰然として動かず、

そのまゝ釣して居りし船、尚ほ十艘ばかりもありしが、此等を思ひ合はせば、愚なる点に於ては、確かに予れよりも一段上乘の愚なりし也。愚もあゝに至ては、最早や何とも評しやうのあきと也。是れも露伴氏が、自ら物語りし中の一節、さても風流とは、寒き者かな。

◎道樂は皆愚也

道樂と名のつく者は、何事によらず皆愚なる者也。決して利口ある者には非らず。利口ある事には、決して趣味あるとなく、愚なる事に、味の多き者也。されば愚なる話は、聞く者も面白く、面白き話は、概して愚ある者也。利口者は、面白き話をなし得ざ

る者にて、面白き話をする人は皆愚なる人也。話の面白きだけ、それだけその人は利口ならずと見る可き也。利口者は、面白き話の出来ざるのみならず、其話す所は、凡べて面白味なき者也。道樂に凝るは、面白味あればなり。されど其面白味ある丈け、其愚あるを知るべし。話道樂も、亦愚者の事なりかし。

◎神代の研究

希臘、羅馬のミトロギーは、歐羅巴人の、頻りに調査研究する所にして、印度の古代、アツシリア、パピロニア、支那の上古史の如きは、泰西の學者は、古物學や人類學、言語學などの方面より、熱心に其調査を怠し居れど、獨り我日本の神代に就ては、我邦

の學者すら、一の研究をあたゝるは、いぶかしきと也。無智無學ある神官や國學者に、神代記を一任し置くは、祖先を闇黒ある迷信中に棄て置く者也。そのうち早晚、泰西學者も、日本神代記の研究に着手するの日もあらん。泰西人の手を假りて、始めて闇黒ある天の窟戸の鍵を啓かるゝとは、我邦人の耻辱也。神社の縁起由來や、神代記の學術的研究などは、學者の調査すべきとなりかし。

◎銀の橋

暖かき夜の、十八夜十二月二十五日の月、東の空に横雲を離れて、長さ數十丈、幅三四間の、銀の橋をば、江に跨がつて、東より西へ水面

に渡したり。昔より橋場のあたりには、橋なかりしを、源頼朝の
あゝを過ぎしとき、舟を集めて上に板を敷きたる、舟橋といふ
を架して、軍を渡せるとありと傳へり。橋場といふ地名は、かゝ
る由來によれりとの也。或はろは太田道灌の時也ともいへ
ど、新田義興が、足利氏と戦ひし古戰場にもあり、頼朝が奥羽征
伐に赴きしとき、の街道にも當りしとのとなれば、此邊に舟橋
をかけて、軍を渡せしは、古るき鎌倉時代よりのと也けらし。六
七百年前、頼朝がこゝに舟橋をかけし外、今に此當に橋のかけ
られざりしを、今宵は月の如何に思ひけん、銀の橋をばかけて、
向ふ岸より我軒の下へ、通ふべき道は開かれぬ。嫦娥とやらい
ふ月宮殿の天女が、手を迎へ取らん爲の橋か、たゞしはそが我

家を音づれんが爲めにかけたる者か。いづれにしても今宵俄
かに橋の浮き出でしは、月に住むと聞く、彼の天女の魔術によ
れるとゆめ疑ふければ、それを踏み行きて、彼を訪はんか、彼の來
るを迎ひ受けんか。とかくするうち、風さつと水面を吹けば、銀
の橋板、きら／＼と動きゆるぎて、踏み渡るべき術もあし。梅咲
きし向河岸には、羅浮の仙女も天降りつらん、渡りて見まほし
けれど、銀の橋踏み渡るべき、球の鞋かければ、空しくそれを眺め
て、あなうつくしの銀の橋かなと、たゞ東の方を見つめるばか
りとは、地に匍ふ虫の賤ましきかも。

◎東風と北西の空

墨田の上より眺むれば、北には筑波、西には不二、あれある爲めに、更に江上の風光に、一段の光采を添ゆる也。されど筑波の見ゆるときは、多くは北風の卸ろしあるときに、夏は涼しく心地もよけれど、春の初めは、寒さを覚えてあまりよき心もせず。又不二の見ゆるは、西風の寒むき時を常とすれば、是も暖かなる時節には、多く見えぬが也。されば東風吹く春の頃には、筑波も不二も、大抵は霞にくもりて見えざれば、そは櫻の花に此世界を譲りて、しばし世の人の目を避ける者とも見るべきか。然るを墨田の景色に通ぜざる人等が、折々をに東風吹く時に筑波も不二も、眺めらるゝやう文などにもものするは、大なる誤也。是れ等は墨田の上に住みて、よく注意し見ざれば、一寸氣の

附かぬとども也。

◎ 鷓の群

都鳥の群るゝより外、他の鳥を見しとなかりし江の上に、めづらしくも、異なりし鳥の群をあして、江の流れに飛び下りしを見たり。雁の歸るさ、群を茲に乱せしにやと、瞳を凝らして見れども、雁にはあらざりき。白からば或ひは鷓か、鷓かともすべけれど、其白からぬところ、確かに他の鳥ありき。鳥知れる人に聞きしに、そは鷓なりしとの也。秋の江に下り來べき者、春の初めにむら起ちしは、めづらしきとといへり。鷓起つ下に、鷓の吾れ關せず焉と、澄しがほにて泳ぎ居りしものどかある心ば

へとあそ覺えられしか。

◎燕の如き雲

十八夜の月、銀の橋を江にかけし夕、東の空に横さに棚引きし横雲、北より南に吹き流がされて、長さ三四尺ばかりの燕が羽を擴げて飛ぶ如き形の者、二つ三つ續いて、繪の如き空をなしぬ。かゝる形の雲は、いとめづらしき形也。千變萬化の妙を極むるは、雲の性とはいひあがら、燕形の雲とはあまりに珍らしき形ならずや。郭公の形あらば、まだ月に縁ある形なれど、月に燕とは、さても奇なる配偶なりしや。

◎梅咲きし朝

眞垣一重隔てたる、庭の梅、昨日まで咲き揃はざりしが、早梅なりしにや、今朝十二月十六日起きいづれば、はや満開にて、眞白うなりしも、二三日前よりの暖さに養はれて、かくは催したりしとぞ。此朝よとの外のどかにて、日もまばゆく照らず、たいどよんだる曇りし朝なりしが、鷗のむら立つ春も、旭日まばゆき朝よりは、其數太だ多く、さては此あたり梅の咲きし、花影を江に寫し居る、其下を尋ねて、かくも集りつどへるにや。水にうつれる梅の影、其上に泳ぎ群る鷗の影など、また思ひもよらぬ風情なりき。そのあたり横漕ぎ過ぎる舟人の、梅咲きしに心づかず、空

嘯いて通り行くは、鷗の心を知らぬふるまいぞかし。『うめさけり白梅さけりその影をかもめむれきぬ春の日浅くも』『かも泳ぐ水のさゝ波春をぬるみ上に咲く梅下にさすかげ』一首の歌、鷗によみきかせん術なきは、惜しきとどもなりき。

◎金衣公子

霜の朝まだ寒き、一月の初つ方より、晴れたる日には、朝を朝な、舌だめもせぬ鶯の、江の岸なる我庭の籬に來りて、羽振を整はせ居りしを見しが、梅咲き初むる頃より、いかにしてけん、しばしが間來ずなりぬ。いづれの梅に迷ひて、かくもあゝへは音づれ來らざるやと、久しき間いぶかり居りしが、けさ十二月二十七日ふ

と庭の南角なる椎の木の茂みに來て、ホーンホクテヨロと、舌だめ初めけり。まだ眞の啼き音を出さゞれど、金衣公子の鳴き聲聞きしは、此朝が始めてのとなりき。梅も咲けり、鶯も啼き初めり。春の繪卷は、此朝より予開かれたるありき。

◎十九回の雷鳴

久しく晴れつゝ、きし空は、此朝三月一日曇りて、空雷ならざりしが、午頃に至りて、俄かに雷鳴を聞きぬ。地の底より鳴り出でし如く覺えられしは、地雷復の卦に當るべしや。水鳥群を亂して江上を飛び、鳥低う水面にたれて起ちしも、雷鳴を畏れし爲めにや。二回まで低く遠き鳴方ありしが、三回目に電光あり、雷鳴

も甚だ高く大きかりき。雨は烈しく降り、四回五回六回七回を経て、八回には大砲と打ちし如く、窓の紙は震動せり。雨烈しく電光閃き、雷鳴は九回目に来れり。十回、十一回鋭き響、忽ち黒雲天を蔽ひ、眞黒になりぬ。十二回、雨滂沱、十三回、はや空明るくなりぬ。十四回、電光雷鳴、十五回、十六回、十七回、十八回、十九回、空晴れ渡りて、鶏の聲諸所に聞えゆ。一時より二時まで一時間が間のとまりき。

紫 雜 記

◎七色の長虹

筑波根が、紫淺う染められて、墨田の土手に、春の色が、やう／＼萌え出でた。早い梅はもう、咲き揃つて、鶯もはや舌だめて啼いてゐる。二月の終り半ばは、のどけき空が晴れつゝいて、はや三月の一日となつた。永らく續いた天氣が、此朝起きて見れば、ほんのりと曇つて、午頃から雨とあり、十九回の電光雷鳴で、雷あらしぬ景色であつたが、夕方になつて、河風北に廻はつて、東の空から晴れ渡つたが、よれまであまり見たとのあい、大なる虹の

弓が東の空に架かつたのを見た。丁度眞向ふの江の岸から起つて、高さは天空の眞中を極はめ、北に下がつて石濱明神の森の東へ落ちて未は少し模糊としてゐた。明かに立派な半圓形を、太く大きく天空に描いて、紫紺色、藍靛色、綠色、黄色、橙色、赤色、牡丹色、と順次に外輪廓から内へかけて、七色が鮮明であつたが、其一番内に色どつてゐた牡丹色のあざやかさといつたなら、また格別であつた。それから内に幾筋となく、同心圓周が書かれて、牡丹色の薄い半圓形が幾つも重あつて居た。此大きい虹を雄虹とすれば、其外にまだ一つ稍薄う現はれて、やはり同心圓をかした、半圓周が、七色にあやどつて見えたとは、それが雌虹であつたに相違ない。霓といふのは、是れであつた。良久あ

つて、北の方から白い一むらの雲が吹かれて來たので、追々北の方から消えて仕舞つたが、コンな立派な虹は、是れまで見たとがなかつた。是れが春の神が、下界へ天降つて來る爲めに、天門へかけられた、七色の畫橋で、其形をチヨイと、地上に住む人間に、現はして見せたのであつたらしい。

◎古雛の new 衣

まだ若い垂髻の童子であつた頃、年々柵を設けて飾つた、内裏、さん始め、色々の大人形、小人形、紙雛、立雛、や其外多くの雛道具、姉が若い時分の雛遊びの紀念として、今に残て居たのは、二体の内裏さんと、僅かの古雛ばかりになつてしまつて、多くは

永い月日の間に、ドウなつて仕舞つたか、一も見えぬ。其内裏さんも、衣裳は古びて金襴に最早や光りもないが、たい古い時分の手堅い作り方の雛であつた。けに、顔形は今も昔しも同じやうに新らしく見ゆるのと、其王様の厚額の冠、女王様の天冠櫛が、やはり昔の儘に、さほど古びてゐないとだけが、若い子供の時分に、棚に飾つて拜んだ時を想ひ出させる。姉人は、其衣裳を新調して、お召換へをしてあげたいといつて、大分丹精を凝らしてゐるが、其内に白綾の袴、金襴の素袍と、男王様の方が先きに其束帯が出来上がつて、間もなく女王様の、塩瀬の緋袴、綸子の下着や、金襴の袴襦も出来て、冠の纓も、新しく紫絲と赤絲とて二体の分丈け組み直したので、内裏様を縞臺の上に、並

べて見た。雛こそ古びたれ、顔には新らしい艶があつて、新調の衣裳に改めたから、丸で新物になつた。品物が手堅いから、中々今時の十軒店で買つて来たのと、同日の談でない。外に大小の雛様がないので、内裏様も何だか淋しそうに見える。是れも時節が違ふて居るのだから仕方がない。まさかにお嬢の眞似して、棚を設けて澤山の雛を集めて、お遊びでもあるまい。却つて内裏様に笑はれるかも知れぬといふので、菱餅やお膳だけを用意して、梅の花桃の花などを、小さな花立てにさして供へて置いた。けが、さすが女のたしなみである。久しく簞笥の引出に、紙で顔を包まれて仕舞ひ込まれてゐた内裏様が、二三十年ぶりて縞臺の上へ並べられたので、王政復古、王室中興とでもい

ふべしといつて笑つた。

◎雛と梅花

古い子供の時分は、舊暦の三月三日に、雛祭をしたので、丁度緋桃白桃や櫻の盛りであつたが、今の雛祭は、時節がまだ早いので、桃も櫻も紅梅も、まだ中々に咲かぬ。やつとのとて、梅の早いのと、椿の花が、咲き揃つたやうな時分である。最も室咲きの桃や紅梅は、疾くに咲いてはゐるが、是れは無理に咲かせたので、本物ではない。さすれば、今時では、雛と梅花と、時節を同うしてゐる者とまなければならぬ。雛にはキツト緋桃と紅梅とでなければ供へられぬといふわけがないから、梅の花でも差

支へはないのだ。昔しは桃の花紅梅と配偶せられてゐたが、今は梅の花に配偶せられるのである。是れも一つの改革であらう。古い時分から三月の節句に掛けて一幅の雛の畫があるが、それはやはり櫻の枝と京人形とをかいてある。是れも今度は、誰れかにかき直して貰つて、やはり梅の花と京人形とに換へねばならぬ。

◎色絲の手鞠

そろ／＼雛の節句にもなつたから、近所の少女等は、やさしい聲して、手鞠歌をうたひ出した。ふと思ひ出したは、姉の子供なりし頃、お師匠さまに手傳つて貰つて、丹精して縫ひ上げた、

花づくしの色糸縫に、金糸銀糸を取り交せた手鞠の、仕舞つてあるといふとてあつた。取り出して見たら、やはり重々に紙やあんかで、包みくるんであつて、何年立つたか分らないが、まだ新しい縫ひ掛けのやうに見えた。手に取つて見ると紫、赤、紅梅色、紫紺色、黄、橙、薄紅、薄紫やら、牡丹色やら緑色やら、萌黄色やらさまざまの糸で、牡丹芍薬堇たんぽこ、さまざまの花盡しがあつた。縫ひ上げた時の丹精は中々大した者であつたらしい。チヨイと轉がして見ると、チリ／＼と鞠の中で鈴の音がしておた。是れは其中へ小さな鈴を二つ三つ、縫ひ込んで、其内を空にしてあるからである。さまざまに意匠を凝らした者と見える。さて其手鞠をつく時に、色々の歌があるが、あのやさしい子供の

時の歌は、覚えてあるかと聞いて見たら、みんな覚えてないとの姉の答へであつた。二十年前のと、あるほど覚えのある筈もないのだが、近住の少女等が、歌つてゐる歌を、一つ覚えて見ようと、時々少女等と呼び入れて、その歌を習つて見た。何づれも無邪氣な歌ではあるが、今聞いて見ると、如何にも今時の少女等に不向きのものである。大分文學の思想に養はれた婦人で、既に人の母とあつてゐる者も、澤山ある筈なのに、なぜにまだコンキ時勢後くれの手鞠歌をうたはして置くのであらうと、少し變な氣が出た。獨り手鞠歌ばかりではない、手鞠の縫ひ方も、モウ少しは趣味の多いことにして貰ひたい。此等の意匠を凝らして、よい手鞠を縫ひ、よい手鞠歌をうたはかすのは、母た

る、者のしつてではないか。ユンな所は、今時の詩人とかいふ者の注意す可きとだ。

◎桃花と紅梅

桃の花と紅梅とは、昔からやさしき花ときまつてゐて、うら若き女の比較に用ゐられてゐるのが、歌や俳句の常であるが、是れは支那の詩に、ソンをを用ゐたから、その感化を受けたのであつたらしい。兎に角艶なる花、なまめかしき花として、今は誰れでも桃の花と紅梅とを、女性の者としてゐる。支那で牡丹をば、名花として、絶世の美人を、之に比較をするのが例であるが、我邦では櫻の花を名花として、之を無類の美人に當てる

のであるが、桃花と紅梅とは、支那でも日本でも、ソンを絶世の美人に當てるといふ意味では、あいやうだ。たゞ戀しきあつかしき人に當て、其面影を此二つの花に偲ぶまでのとである。此等の点が、桃の花と紅梅との二つが、牡丹や櫻と違つてゐる所だ。牡丹や櫻は、或る最高級に用ゐられると極まつてゐるが、桃の花と紅梅とは、一般に同情の強き花で、凡べての戀人、なつかしき人に用ゐられるのである。ソウして見れば、或る意味から言へば、牡丹と櫻とは、國色に當てると極まつてゐて、貴族的の者である。けれども紅梅と桃の花とは、そうとは極まらないので、ドツチかといへば、平民的であるのだ。

◎海洋中の植物園

昔から花籠、花車などいふ者があつて、錦繪などに子供の時分から多く見たとがあるが、今は大きな花立てに、色々の花を活けるのが普通で、花籠や花車は、何でもあつたが、やはり花籠、花車の方が、何んだか古風で面白い。花籠はまだ時々見るともあるが、花車は、お祭の出しか何かで、造化の花籠を車に載せて引いて行く者の外は、見たともないのだ。今の世になつて花車も面白くないから、更に進んで花船といふのをやつて見たら、規模頗る大にして、贅澤の骨頂であらうと思はれる。盆栽を集めたり、植物室をあしらえたりするのは、隠居の仕事であ

る。航海中、船室に熱帯地方の長け高き蘇鐵やなんかを、ソシア
ル、ホールや、食堂に飾つてもあつて、小さな花は、澤山裝飾に用
ゐられ、何か祝意を表する時などは、甲板にまで鉢植の花を並
べて、満船悉く花といふ有状である。此等を更に大仕掛にして、
花木を載せる、娛樂の爲めの船を大洋に泛べ、海中の公園を作
つたら、コウ航海が盛んになつた時代には、航海中の慰勞を、此
花船に暫し忘るゝに、至極妙であらう。ツマリ海洋中に船の植
物園を新設するのである。櫻も桃も、牡丹も、芍薬も、堇も、薔薇も、
凡べて世界の花、それを集めた船を泛べて置いて、西より來り
東より來る、凡べて航海の無聊に苦しみ、海の外目に見えなかつた時の勞を慰めるといふとは、必らず有益のとでもあらう

獨り植物園といふのみでなく、音樂、繪畫其他の美術品をも並べて、一の公園船を作つたら、更に妙である。

◎船の別荘

花木を集め、音樂、繪畫其他美術品を陳列して、一の公園船を、海洋に泛べるとは、面白いとてあるに極つてゐるが、それよりは今時世界の富豪とも呼ばれる者が、随分さまざまの意匠を凝らして、贅澤を試みては居れど、まだ一人も船の別荘といふ者をあしらへた者があゝい。昨年米國の富豪が其子供の新婚旅行の爲めに、郵船會社へ船を一艘借切りにする談判をしたのとであつたが、其後新婚旅行の巡遊船を自分で新に造つた富

豪もあつたと聞いた。此等は一の船別荘であるに相違ないが、まだそれ丈げでは面白くない。既に遊歴、娛樂の爲めに造つた船であつて見れば、それを眞の別荘たらしめるのは、必要であるのだ。花木を集め、音樂、繪畫其他美術品を陳列して、其船を少くも陸地の別荘同様にせねばならぬ筈である。まだコンナ船の催しを聞いたとはないのだ。屋根船に歌妓を舞はせて、墨田の花見と洒落れる位を、豪奢と心得るやうな、小さい膽玉では、トテもコンナ考へは夢にも浮ばんとてある。新婚旅行の爲めに、態々船を造つたと聞いてさへ、コンナ連中は、ビックリするに相違ない。まして船の別荘をこしらへよ、船の公園、船の博物館、音樂館をつくれといふをや。併し、何にもそんなに驚くに當

らない。社會の進運が益開けて來ると、コンか性質の船が、幾らも出來るやうになるのは、疑のないあとである。狭い陸地に匍ひ廻つて居るより廣い海洋を、コウやつて横行する方が、餘程文明である。

◎豊太閤吉野の花見

太閤記を見たが、豊太閤の花見といふのが、二度ある。一は吉野花見で、一は醍醐の花見である。朝鮮征伐の真中にコンな風流豪奢を極むる餘裕は、迎も並人間に出來る業ではないのだ。『文祿三年二月中旬、太閤は花見の御遊思し召し立たせられ、二月廿五日、大阪城を出させ給ふ。御供に參る大將より下司に至

るまで、今日を晴れと、うるはしく粧ひしは、花より先きに人の目を驚かしぬ。太閤には、例の如く付鬢に作り、眉鉄漿ぐろに、若やかなる御有様路傍に拜む鄙人等、其まだ老いまさぬを悦びまつりき。廿七日は、紀伊國六ツ田の橋を過ぎ給ひ、市の阪に到り給へり。大和中納言秀俊卿の、御儲けとて、清き屋形をしつらひ給ひ、中納言殿自ら途に出て迎へ請じ入れ給ひ、數々の御饗應を籠め給ひける。豊太閤御氣色麗はしく、緩やかに其所をも立せ給ひ、聞ゆる吉野山に到り着きては、麓より輿を下り、山路を歩みて輿を遣り給ふ。けふは花のあたりを吹く春風も緩く、卷いて、花田色の空に種々の小鳥囀り飛び、千本の櫻花園、櫻田、ぬだの山、かくれやの松など見めぐり給ひ、吉野山梢の花のい

ろくに驚かれぬる雪の曙、豊臣太閤との御歌をものせられ、御供につかふまつれる人々も歌よみて奉りぬ、さてかねの鳥居仁王門を過ぎて、藏王堂へまふで給へば、爰も中納言秀俊卿の、かねて御舎を營み置き、それに入らせ給ひ、彼所に一夜を明し給ふ、翌る日は、櫻が嶽、後醍醐天皇のおはしましける皇居の跡など御覽じ、爰かしこに日を過し給ひぬ。是れが豊公吉野の花見を書き傳へた者であるが、豊公はそれから高野山に上ぼつて、音曲禁制の大師の掟をも顧みず、猿樂を舞はしめた爲めに、大雷雨に逢つた話もあるが、是れは大師の掟を破ぶつたとか、雷神が憤りを發したのだといふとだ。あれよりは、其後醍醐に花見をした時の方が、餘程大仕掛に豪奢風流を盡くした

やうに思はれる

◎豊公醍醐の花見

位人臣の榮を極め、關白の上に、太閤といふ者を置き、己れ其位を冒し、内には天下の群雄を侯伯にして、外には再び朝鮮の征伐をなし、最早や晩年に近づいた、慶長三年の春に、醍醐の花見をやつた時の豊公、數寄風流を盡くした所は、道長、清盛も、コウは趣味がなかつたやうに思はれる。『三寶院修理其他の九箇條の式目』、『京大阪伏見に在番の諸大名が醍醐の山に思ひくゝの趣を盡くした風流の茶屋』、『伏見より醍醐まで道の左右に埒を結ばせ、色々の織物錦の幕を張らせしと』、『勅使の入御』、『攝家清

華其他諸侯太夫及京大阪奈良堺の町人までが贈り物献上物
せし珍菓珍肴』『加賀の菊酒、麻地酒、其外奈良の僧坊酒、博多練
酒、江川酒』酒ばかりすら、かゝる多種の捧げ物があつた。『若むし
たる石橋の左に、板廂したる亭、是れは増田長盛が、構へし茶店
にて其妻緋の衣に、萌黄の腰裳緩く結び、若君の御手を取つて
入れまいらせ』『玄以法印が茶屋は、山の峰にありて、心付あき
浴室を構へ、美しき女房の湯くむ有状、太閤いたくめてさせ給
ひ、衣を脱で浴み給ふには、や御膳をすゝめ奉る』『小川土佐守
が茶房に入らせ給へば、京師の傀儡人多く参りて色々の狂戯
をかし、若君北廳を始め女房達を慰め参らせ、傍に數寄屋あり
て、古代の茶器を飾り、古畫を壁に貼りて風流を添へ、山の半に

は清らかに家を造り、店には賣物に擬し扇、張子、雛、疊紙、人形な
どを棚に置き、櫻の梢には緋の糸にて網をつくり、鈴を多く付
け、春風に吹かれて鳴り、谷水を受け溜めし池に、小さき船を浮
べ、人形あまたあやつりて漕ぎ廻はすあど、幼君を御慰めの爲
めとて何れも美麗を盡くせり』『岩の狭間、草茂き中に、朽たる
木をたよりに、しつらひし菴、柴の垣、竹の網戸物さびたり。太閤
是に入せ給へば、新莊入道東玉の茶亭にて、二八許の女四五人
皆茜染の衣着て、焼餅を折櫃に盛りて捧げ奉る。酒の用意にと
て、棚にかざれる瓢箪、是れかん我菴の酒樽にて待ふといひ、土
器に傾ふけ進め奉る。向ふの山より網を引き、種々の珍らしき
肴、名ある酒など、葉巻に入れて、鞍馬山の巻落に擬したるなど

殊更に珍らしかりき。こんな安排なれば、長東や石田や大谷あ
どの茶亭も、皆ソレ／＼數寄を凝らしたに相違ない。かくも數
寄を凝らして、而かも豪奢千古に獨歩する程の花見は、あまり
聞いたとがない。殊に醍醐の地形が、開豁で塏爽の地であつて
淀川の平原を見卸ろし、何となく規模の大きい所がある。豊公
が此地を選んで、コソナ數寄を盡くした花見の宴を張つた
けれども甚だ心持がよい。花見の仕様にも、色々の遣り方もある
だらうが、たゞ豪奢ばかりでも面白くない。此數寄を凝らすの
と、相待つのが肝心である。徒らに遊君、白拍子ばかりを集めた
清盛の遣り方は、趣味か却つて少さいやうだ。

◎朧月の墨隄

櫻が咲いたとあると、上野から墨田の土手かけて、花見の人
が、雑沓を極めるのは、今も昔の通りで、色々のお道化、酔つばら
い、逆も大手を振つて、往來するわけには往かぬ。間違つて突き
當りでもしようもんなら、直ぐに喧嘩が始まるは當り前だ。コ
ソナ五月蠅のを忍んで、人を避け／＼土手の花見をするほど
の勇氣もないから、いつでも晝の間に、花見に出掛けたとがな
い。椽先に坐つて、雙眼鏡で、川向の花見連が、さま／＼のお道化
や粹を凝らして練つて行くのを眺めて、喜んで居る位にとだ
ソレだから、朝早く起きて、墨隄に歩むか、夜深けて夜櫻を見る

と氣取るか、ドチラにしても無人の境を、大手を振つて濶歩しながら花見が出来ぬと、面白くないのだ。朧月夜の墨隄ときたら、殊に妙だ。晝の埃も起たず、お道化、酔ばらひや、晴れぎの女子供や、一々此等と衝き當らぬやうに避けて歩く煩ひもなく、時々江の上を、三味線鳴らして上ぼり行く屋根船位がある丈けで、土手の上は、往來殆んど絶ゆる有状、折々に書生の四五人吟詩をあして過ぎ、座敷戻りの歌妓、途を急いで行くともあるが、朧ろなる夜は暖かいもので、静かな散歩の前へ、生ぬるき風が花片一片二片吹き散らすも、悪い心地はせぬ。河に波起たねば、花に風も吹かず、人に影なければ、花にゆるぎも見えぬ筈だ。たい朧ろ一枚に、花も河も、土手も人も、包まれて居て、夢のやう

におぼつかまい足元で、薄暗い花影を踏んで行くと何だか花神の暖かな手で撫でられてゐるやうな心地がする。

◎霞の筑波

椽先きに腰打ちかけて、河の上流に、筑波を眺めるとは、毎朝のことであるが、春にあつてからは、中々毎日見ることが出来ぬので、是れはどうしたわけだと考へて見たら、板東の平野に入重霞とやらが立つたからであるといふと、分つた。春の水が、四澤に満ちて、其水が春の暖さで蒸發して、霞が立つのであるから、さしにも広い、利根流域の平野に、あれ位の霞が立つのは、當り前のことだ。ともすると、朝夕の霞が少し薄らんだ時分に、薄紫

の淡色で、男女山の形だけ、輪廓を取つて、東北の空に浮いてゐるのは、却つて奥ゆかしく見えるのだ。春暖かに日ねもす、化粧を凝らしてゐるのを、都人に見られては嫌やだといふ爲めに、コウ薄物の戸帳を、半天へ掛けてゐるのでもあらうか。サリとは山の神も、あまりにうぶらしいではないか。白帆眞帆、上流さして上ぼり行く、南風の時などは、其帆までを薄紫の戸帳の中へ包んで仕舞ふ所を見ると、何んでも自分の近邊へ来る者は、片つ端しから包みくるんで、都の人に見られぬやうに匿くし立てする者と見える。春や、濃き筑波の紫、その色どけて水に流るゝ、其河の水、今日は上流より紫色に見ゆるのは、筑波の女神が、化粧の水であつたか。

◎佛誕生と喇嘛佛

仇な櫻の今を盛りの、四月八日、風に心はないが、花はチラ／＼花吹雪を始める。此日釋迦の誕生日であるといふので、咲き乱れたる櫻の枝を、幾本となく花立にさし、其花影に釋迦の金像を置いて、灌佛を始めた。甘茶の湯で洗つて、そのまゝもとの臺へ置いた。此釋迦像は、喇嘛佛であるので、今年の夏北清から戻つて来た友が、去る親しい喇嘛僧から譲り受けて、土産に持つて来たのである。西藏の山か、蒙古の沙漠か、北京地方の荒れたる野原の寺に、くすぼれて居た喇嘛佛が、如何なる因縁かは知らぬが、今年こゝで櫻の花を上に見え、灌頂の甘茶に、幾年佛

身に積つた垢を洗ひ去られたのは、考へて見ればまた不思議な縁である。薄暗い汚ない、喇嘛寺の隅つこに、煤を被つて、日光をさへ見たとのない佛が、明るい床の上に置かれて、しづ心なく散る花の下に、やはり同じ結跏趺坐をましてゐるのを、自分で知つてゐるならば、必らず隔世の想をなしてゐるとであらう。『八重櫻心して散れ喇嘛佛の頂きなづる風匂はせやも。』

◎王者の花覇者の花

朝日に匂ふ山櫻、夕日に乱るゝ八重櫻、いづれにしても、その爛熳として半天に咲き匂ふさまは、神らしい花である。牡丹の大きな葩が、地上近く莖に撃て上げられてゐるのと較べて見れ

ば、どうしても神の花としか思はれぬ。牡丹を花の富貴としてあるけれど、是れは霸王の相を具へてゐるとしなればならぬ。こんな品評の仕方では、櫻の花は、大王の風格ありといはねばならぬ。その天を掩ひ地を掩ひ、真白う霞の棚引くやう雪の降りかゝつたやうに、下界を飾る所は、是れは清浄無垢の花である。決して地上の物ではない。王者の花といふよりは、神の花といふ方が、更に適當であるかも知れぬ。

◎櫻の賦

飛鳥山邊へ、散歩がてらに、櫻狩と洒落れる毎に、すぐ氣の附くのは、佐久間象山が作った、櫻の賦を鐫りつけた石碑である。

が、恐らく櫻の賦を作つた人は、象山の外、後にも前にもまだない筈だ。象山の賦が、立派に出来て居るか、ドウかは姑らく措いて、後にも前にもまだない者を、宇宙に一つ残まして往つた丈けが、象山に感服する所だ。櫻は皇國の花だと威張つて見ても、象山の賦ほど丹精を凝らし、苦心を積んだ、歌や詩の大作が、まだ今見たともないののである。文運の開けて詩人文士が、林の如く雲の如くある今日、まだ象山以上の櫻の賦をものする者があゝいと、さてもく、あさけかいとではないか。第一本家の支那でさへ、今時賦を作つる勇氣のある學者詩人もあいのだが、日本の漢學者や詩人なども、賦といふとは丸て知らぬのだ。象山の賦は、賦の法に違つてゐる箇所もあるが、兎に角其賦を纏め

て、櫻の爲めに満腹の錦繡を織り出した勇氣は、敬服の外がないのだ。象山に紹いて、更に櫻の賦を大成する者は、明治の昭代に起らなければ、次ぎの代からは、最早や望む可らずといはねばならぬのだ。なぜなれば、漢文學の素養の深い時代が、だんだんに隔だゝつて往くので、賦などは、益望むべからずとなるからである。櫻の賦を大成するのは、ドウしても此の明治昭代の紀念物とせねばならぬのである。

◎鏡と花

櫻の枝一本、其下に白蠟の火をともしたのを置いて、鏡を寫つて見た。鏡にうつる櫻の影、えも言はれぬうつくしさであ

つた。更に一枚の鏡を取つて、前の鏡に對立させた。両方の鏡を見ると、幾枚となく櫻をうつした鏡面が、無數に現はれて來た。更に二枚を取つて、櫻の花を他の二方からうつして見た。是れにも同じく無數の櫻を現はした。丁度相うつり合ふやうに位置を定めて四枚の鏡が、互ひにうつり合ふやうにして見た。中々旨く行かなかつたが、幾何學上の角度から割り出して、どうやら四枚の鏡共に、反射するやうに出來た。其一ツの鏡面を見ると、其奥無限までと言ふべき程、櫻をうつした鏡面が、無數に重つてゐた。更に一ツの大きい鏡を取つて、凡て小さい鏡にうつしてゐる、無數の櫻をうつし取らふとしたけれど、それは失敗に歸した。サイン、コーサインの割り出し方が、旨く行かなか

つた爲めであつたかも知れぬ。コウして無數の櫻をうつして見ると、其不思議な幻影が、人間世界の現象とは見ななかつた。將來鏡を應用する建築法が精巧を極めるやうになつたなら、それ必らず迷宮か迷樓が澤山出來るであらうと思はれる。魔神の戯れか、一本の櫻を無數の分身にうつし出すとは、理學上怪むに足らないものではあるが、自分てうつしながら、自ら其あまりに珍奇な結果を得たのに驚いた。光線の作用を應用すると、随分色々の幻術を現はすとも出來ると聞いて居つたが、是れ等はまづ其單簡な一ツであるのだ。

◎獅子と花吹雪

行く春惜しむ可し、落花哀しむ可し。咲き乱れたる絲櫻、夜既に深けて、東台に人迹なく、たゞ青い電燈が、乱れたる花の姿を照らしてゐるばかりであつた。律院に心なき長話をつゞけた爲め、夜も深うなつたついでに、夜の櫻を電燈に照らして見て遣らうと、動物園の前までやつて来て、人なき世界を占領したつもりで、備へある腰掛のとまろへ身を寄せて、乱れに乱れたる櫻の、吹雪く下にイんでゐたが、不意に聞きなれぬ、猛獸のうなり聲、あたりシンとした真夜中に、動物園の禽獸は、凡べて睡つて居るべき筈なのに、どうしても其吼え方が獅子であつたらしい。大分風も吹き荒らみ出したが、樹の葉を拂ふ風一音に怖れて、獅子が時ならぬうなりをなしたのか、獅子のうなり

に響いて、花の散るさま、是れは風に吹かれるのであつたかも知れぬが、だし扱に獅子のうなりと一所に、ばら／＼散り出したので、全くそれが爲めに花吹雪が始まつたどしかと思はれなかつた。獅子のうなり、花の吹雪、真夜中に一人、其下にイんで居て、花の狂ふたさまを見ては、思はず手を出して、花の散るのを支へんとしたほどであつた。見る／＼大地一面に、雪の如く花を散らしきつて仕舞つたので、身を投げて其上に倒れ轉んで夜の明けるを待たうかとさへ思つた。花の奥に獅子が住んで其花を振ひ散らすのである。と思ふと、何だか氣味が悪くなつて來た。花の枝々は風にゆられて、電燈に其影がうつさされて、滿地に花の影が動て居る。なんだか花が生きて居るらしく思はれ

て、其の奥から獅子が跳ね出て来るやうな氣味がして、ならなかつたので、其まゝ割愛して還つた。コソな花吹雪にはあまり逢つたともなかつた。

◎五色の唾

千紫万紅の披き鞆だれて乱れ初めた春の繪卷を、河向ひの櫻並木に見ながら、朝起き出で、朝日に向ひ何心なく唾を河に向つて吐き飛ばした。其唾が日の光線を受けて、忽ち五色を現はした。咳唾珠をなすといふとは、聞いて居つたが、唾珠悉く五彩を放つといふは、珍らしいとだといつて、頻りに唾を吐き飛ばした。何づれも五色の彩色を現はして、飛散した。それが面

白さに、矢鱈に唾を吐き飛ばした。朝日に向つて唾を吐くといふは、チト狂氣じみては居たが、その五色の唾を見たさに、頻りに吐き飛ばした。その天罰でもあつたのか、口中遂に乾いて片唾を呑まんとした。が、頓と唾が出なくなつた。是れは致しかたのないとだと思つて、其まゝよして仕舞つたが、是れが五色の唾の吐き仕舞であつたが、其後朝日に向つて、唾を吐いて見ても、ドウも五色にはならない。シテ見るとあの時の唾が、殊更らに五色の色を出したのは、何か光線の具合にもより、又唾の工夫にもよつたのだと、合点はしながら、最早や五色の唾を吐き得ぬやうになつたと思つたら、何だか心細うなつた。

明治三十五年四月十七日印刷
明治三十五年四月二十日發行

定價貳拾錢

著作者

國府種徳

發行者

佐藤儀助

印刷者

池田良藏

印刷者

新聲社印刷部

東京神田區錦町二丁目三番地
東京神田區錦町二丁目六番地

不許複製

發行所

東京神田區錦町二丁目
電話本局二八五二番

新聲社

田山花袋君作

野の花

四版

全一冊美本
定價三十錢
郵税金四錢

我に初戀の小女あり、客窓之を懷うて幾度か枕を濕ほしけむ。今六旬の學暇を得て郷に歸れば、其人健にして益々美、唯將來を照らす希望の光明を仰ぐのみなる時、斗らざりき、我を懷うて、日夜懊惱、心神衰へ行く佳人あらむとは、而も其人振分髪の幼馴染あるに至りては、いかで情緒亂れざるを得可き。あはれ都へての障礙を排して、清き初戀を保つは是乎。半生の幸福我に獻げんとする人の情を受くるは是乎。這般、青春時代に於ける戀の惱みを描けるもの、『野の花』の一巻となす。描寫精細にして行文綿麗。

新 作 小 說

中村春雨君作 **黒塗馬車**

徳田秋聲君作 **驕慢兒**

汀田君作 **別れ路**

徳田秋聲 田口掬汀 四君 素明、百穂 四君
 生田葵山 西村渚山 合著 成美、香涯 挿畫

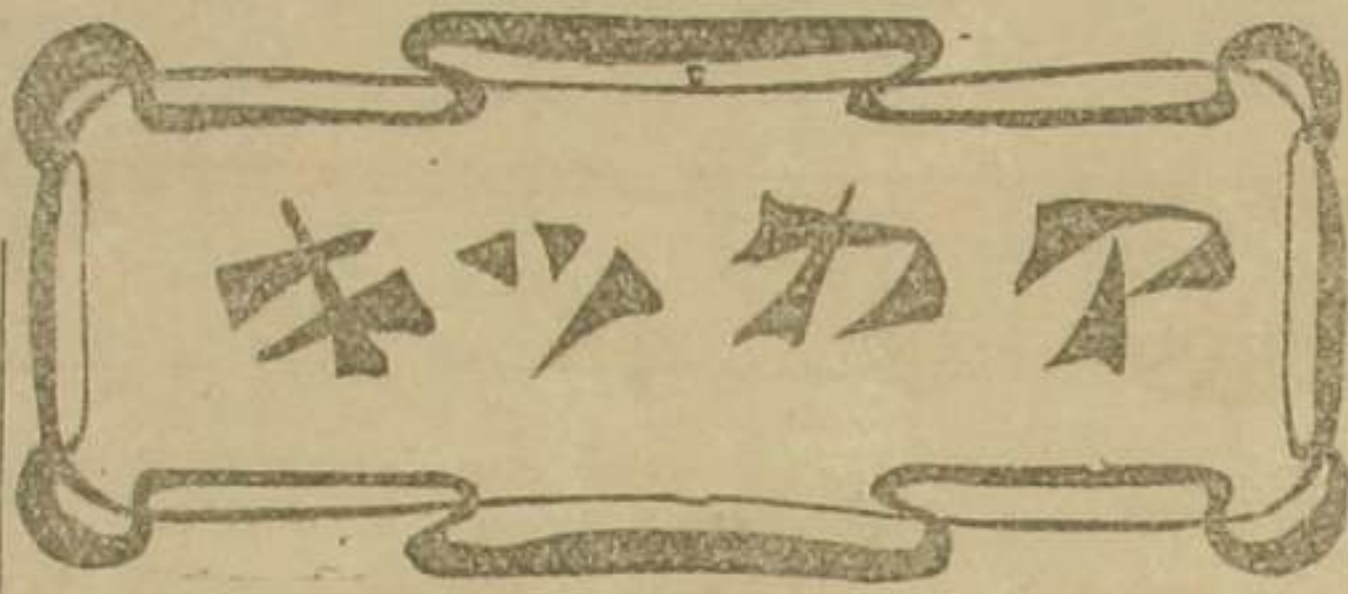
◎ **新婚旅行** 三版 定價 郵稅 金卅五錢

各編定價郵稅共 金貳拾貳錢宛

新聲社出版圖書撮要

月刊小説叢誌

眞に高き藝術の趣味を喜ぶ人に告ぐ



現時の小説雑誌あるもの多くは、玉石雜揉只其紙數の多からんとを争ひ、花柳界の消息を傳へて讀者に媚びんとするの傾向あり。斯くの如くんば文藝の進歩に一毫の貢獻するなく、社會の趣味を高むるに於いて何等の補ふ所なかる可き也。我「アカツキ」は之に慨する所あり、今春一月始めて世に出でたるものにして、大判百餘頁、美はしき洋紙に包めるものは、文想最も秀でたる傑作を以てし、之に添ふるに短篇小品及び時文の評論等あり。而して其小説たる敢へて其名の高きと世に隠れたるを問はず、唯其作者の主張を遺憾なく發揮せる苦心の作たる也。されば、唯洋紙を買ふを主とする人はいざ知らず、眞に高き文藝の趣味を樂しむ人は來りて「アカツキ」の小天地に遊ばる可し。表紙口繪其他の体裁は、最も意を用ゐ、佛國最新の美術を參酌して、一新機軸を開けるもの、美觀他に比なし。

定價 一部定價拾八錢、郵稅四錢とす。發行 毎月期を定めて注文一切前金に限り、六ヶ月前金は郵稅共金壹圓貳十錢發行 十日に發行す。

現代百人豪

第一部二十五錢
郵稅四錢

現代の入豪、偽人豪百士を捉へて之を記傳し論評す。筆者は皆奇警の見と、縦横の筆とを以て世に鳴るの士。眞價之が爲めに現はるゝ不遇の傑士あり、假面之が爲めに剝がるゝ曠世の偽人あり。蓋し近時の出版界稀に看る快心の書なるを信す。

第一編目次

市川團十郎 青柳有美
近衛霞山公 國府犀東
大井憲太郎 長井金風
古川市兵衛 正岡藝陽

尾崎紅葉 國木田獨步
常陸山 笠山
妖僧雲照 田口掬汀
▲表紙……平福百穂畫
▲口繪……結城素明畫

第一編 五月五日刊

全二十冊
每月一回發行

第二編目次

大隈重信 田川天民
三宅雄二郎 長井金風
小村重太郎 國府犀東
正岡子規 S S S

松本重太郎 齋藤弔花
藝者富子 青柳有美
本田庸一 正岡藝陽
老俠佐兵衛 奥村梅臯

岩本善治君序 田口掬汀君著

(新刊)



宗教文學

一條成
美君畫

全一冊美本
定價廿五錢
郵稅金四錢

今の文士に大理想なく大主張なきものは、宗教的信仰なきが爲めのみ。宗教的信仰を抱いて、其詩其文始めて生命あり、活氣あり、靈火燃え異采煌耀するの境に至る可し。本書は一面宗教と文學との關係交渉を精細に論ずると共に、一面今の文士の信仰なきを痛罵して大に反省を促したるもの、論議卓抜、文章雄健、文事に志ある者の、當に三誦すべき近時の大文字也。

文學 社會 美術 演劇
評 論
沙 上
放 語

あれ新聲社同人が、文藝と社會の諸問題に就いて、滿肚牢騷の霸氣を漏らしたるもの、直筆直言、熱罵烈言、云はんとする所を云ひ、論ぜんとする所を論ず、言自ら活氣あり、辞皆生命あり、現時の所謂評論家の左顧右眄、他の恨を買ふを恐れて、死文字を列ぬるの比に非る也。

全一冊 定價廿五錢 郵稅四錢

著君阜梅村奧

醒一噴一

金子薰園君 高須梅溪君序

梅阜奧村君久しく都門の紅塵を避けて、河内に在り。延元の古陵春寒き所、筆を揮うて文藝の諸問題を議し、當代の人物を論評す。輯めて「一噴一醒」に收む。眼東西を射、胸萬古を藏する、好肝膽を有するに非ざれば固より能はざる所。若し夫れ其文に至りては、才人林立の文壇、何人かよく君と争ひ得るものぞ、例へば是れ健兒騎して左右馳突するが如く、千言萬言一氣に呵して、縦横奔放、氣勢浩漭、精悍の氣紙上に滂薄する、誠に一代の大才、妄りに摸す可からざる也。

錢四稅郵 * 錢十二價定

正岡藝陽君 田口掬汀君序

柳内蝦洲君 内田硬石君序 尾池狂民君著

興日本歟亡日本歟

全一冊 洋製

定價 廿八錢

郵稅 四錢

筆を中空に擲ち、頭を天外に擧げ、牢騷鬱勃の霸氣を吐く、就中興日本策を樹て、日露の開戦を唱ふる邊り、立論堂々、筆墨淋漓、痛快極まりあり。

金子薰園君 尾上柴舟君選

叙景詩

結城素明君 平福百穂君畫

所謂新派和歌ある者の浮靡猥雜、人の子を毒するの甚しきを**青年**の作中、叙景客慨しこゝに天下の**青年**の觀のもの數百首を集む。皆是れ温藉流麗、例へば春深く花盛ある時、細流の杳然として平野を横ぎるか如く、飽く迄自然にして飽く迄温藉、素香冷艶にして而も婉麗の別天地あり。

(全一冊、美本、定價廿五錢、郵稅四錢)

著君明有原蒲

ばかわ草

畫君也審邊渡

有明子、幽邃崇高の調を以て、清新奔放の想を歌ふ。戀に惱むの涙あり、世をうれたむの血あり、自然を讚するの情あり、之を掩ふに七五の辞、五七の調を以てし、抑揚自ら節に中り、抗墜心に適ふ。激する時は悽愴人の心を寒からしめ、温なる時は、艶妖眼を眩せしむ、其多彩絶美の手腕は、真に韻文壇を獨歩するに足る。宜ある哉一部の青年其詩を學びて、有明調なるもの、至る所に見るに至れるや。「草わかば」は實に大なる江湖の囑望によりて生れたるもの也。

錢四稅郵 * 錢五廿價定

農學士柳內蝦洲君著

學生叢書

第壹編 每日新聞主筆 島田三郎君序 **廿世紀の學生**

第貳編 前外務參事官 志賀重昂君序 **東都と學生**

第參編 青山學院總理 本田庸一君序 **學生と生活**

第四編 米國哲學博士 淺田剛南君序 **學生の理想**

第五編 辯護士 花井卓藏君序 **學生の將來**

第六編 新派青年畫家 一條成美君畫 **學生の立志**

●號外 新派青年畫家 一條成美君畫 **貧兒成功談**

本篇定價廿錢
限郵稅四錢

全六部 定價八十錢
郵稅四錢 宛
全六部 定價八十錢
郵稅四錢 宛

新婦人觀

文士寺內子誠著述

●新しき眼光を以て婦人を觀、新しき思想を以て婦人を論ず●

第壹編 婦人の使命 美一條君畫成

第貳編 婦人美觀 美一條君畫成

第參編 女學生 美一條君畫成

第四編 社交の女王 美一條君畫成

第五編 婦人と文學 渡邊君畫成

第六編 婦人と家庭 美一條君畫成

●意を舐裁に用ゐて、裝釘極めて美。婦人の書架を飾るに適す●

全六部 定價廿五錢
郵稅四錢 宛
全六部 定價廿五錢
郵稅四錢 宛

新派畫家 一條成美君著

(製本既成)

新派彩畫法

全一冊 定價廿五錢
頗美本 郵税金四錢

著者一條氏は獨特の描線と獨創の色彩法とを以て新に一旗幟を樹てたるの士、其超凡の手腕を有するまとは、氏の作物の大なる歡迎を受くるに看て知る可し。此書は實に氏が特長の彩管を揮つて、多年研究の結果を發表したるもの、一見直ちに色の配合、彩色の按配、運筆の方法を知り得可く、以て水色嵐光筆に任せて浮び、畫布板上自然の聲を聞くの妙境に臻る可し。此書は實に新時代彩畫の絶好模範たる也。

阪井久良伎君著

珍派詩文へなづち集

全一冊 定價十五錢 郵税二錢

題して「珍派詩文へなづち集」と云ふ、題目既に奇、内容奇ならざるを得んや。著者は一代の警句家阪井久良伎君、其獨特の快筆を揮うて所謂珍派文學を鼓吹す。書中、評論あり、隨筆あり、和歌あり、狂言あり、落語あり。萬態一ならずと雖も、飯する所は彼春畫的和歌を嘲り、所謂新詩人の敗徳を罵れるもの、一讀哄笑を禁ずる能はざらむ、而も笑のち涙あり、滑稽のうち諷刺あり、著者は眞に明治文壇を憂ふるの士たる也。

青年叢話

卷の中

卷の下

全三部 冊
第一部 定價五拾錢 郵税四錢
第三部 定價四拾五錢 郵税四錢

卷の上

時代精神の推修
眞智を求めよ
文豪カーライル
腐敗學校と學生

正岡 田口 堀江
西村 醉夢
正岡 藝陽

甲板物語
青年と老年
わが友

田口 堀江
正岡 藝陽
登阪 北嶺
西村 醉夢

才氣とは何ぞ
國民の自覺
早稲田草堂
コニートン
早坂物語
高襟と低襟
青年の根本弊
ハハロフの壯圖

田口 堀江
正岡 藝陽
高須 梅溪
西村 醉夢
高須 梅溪
西村 醉夢

本書は當代一流の青年文士の筆に、論れる者にして、論文と美文とを問はず、皆純潔にして、趣味多く、亦一點猥雑の氣なし。青年諸子が學窓の侶は、本書を措いて他にありなし。

三日月海人員
清貧の詩人
修養の一側面
不朽の精神

田口 堀江
登阪 北嶺
高須 梅溪
正岡 藝陽

年の送迎
眞生の命
おぼろ夜

西村 醉夢
田口 堀江
登阪 北嶺
西村 醉夢

在大學院文學士
久保天隨君著述

東西文豪評傳

(卷壹)

全一冊

定價廿五錢
郵稅金四錢

弱者の聲

弱者の名の下に權利は壓せられ、枉屈伸ぶるに所なき者に代りて、其筆となり、其舌となり、大叫喚、大絶叫、之を天下に訴へ、且つ彼等に一道の慰安を與ふ。

次目載掲

牢獄に接近せよ
富者の福音
薄倖の學工
紡績の女安
弱者の慰兒
可憐の幸也
貧しき者は
弱者の奴隸

田口梅溪
正岡梅溪
高須梅溪
西村梅溪
生田梅溪
高須梅溪
奧村梅溪
正岡梅溪
高須梅溪

價十二錢
郵稅四錢

從軍記者 佐藤紅綠君著述

從軍 決死隊

從軍畫家 石川欽一郎君畫

價廿五錢郵四錢

著者昨年北清の戰に従ふや、四名の同志と決死隊を組織して、彈丸矢石の間、親しく戰を觀る、今其縦横洒脱の文を以て之を録す、光景宛として、睹る可し。挿畫十葉は石川從軍畫伯の筆に成り

天覽

挿畫十葉は石川從軍畫伯の筆に成り

山口中將、福島少將題
渡邊男爵、諏訪子爵題

矢崎少尉

身に卅創を被りて北京城外* 價廿錢
に斃れたる青年武人の典型* 郵四錢

高等師範教授
在大學院

文學士 文學士

登張竹風君序文
尾上柴舟君譯著

(第三版)

ハイネの詩

卷頭、ハイネの肖像(寫真版)
頗美本 定價二十錢
郵稅四錢
附錄、ハイネ評傳(三十頁)

戀の征矢に胸を射られ、薄倖の命運に身を悲しむ者は、來りて「ハイネの詩」を誦せざるや。ハイネは獨乙叙情詩人の尤あるもの也。その詩優麗にして輕妙、裡に炎ゆるが如き情熱あり。戀を歌ひ、人生を歌ひ、運命を歌ひ、乙女を歌ひ、故國を歌ふ。柴舟氏滿腔の精力を傾倒して之を譯す。豊富の詩才、艶麗の詩筆、巧みに其面影を傳へて、薄倖の詩人の面目躍如たらしむ。蓋し獨乙詩人の詩集翻譯の嚆矢にして、短歌新體詩の作者を裨するこの大なるべきは勿論、一般文壇に志を寄する者の好侶伴也。

懸賞詩文集

桂花集

插落彩接花
畫葉虹木園刷
一條成美君筆

「新聲」紙上、賞、百金を懸けて小説、俳美、文、論、文、詩、歌、俳、句、等、を掲げたる者。一卷に集りて、此の青年文壇の偉觀也。

附錄
雁影
ちぎれ雲
題桂花集
亡國の韻
遊仙窟と紅樓夢
金子薰園
田口梅溪
高須梅溪
正岡梅溪
奧村梅泉
全定價
一十二錢
冊五錢
錢四錢

近來絶無の大快書——第四版發賣
 正岡藝陽君著 (大判全一冊 * 定價貳拾五錢 郵稅四錢)

嗚呼賣淫國

卷頭 伊藤博文
 寫眞 新橋梅香 市村家橘

次目

賣淫國とは何ぞ 醜業婦を有せる社會 賣淫學生 賣淫の首府 其他
 當代の淫猥作家 牡丹侯を戴ける社會 賣淫文學 田園の淫風
 優柔不斷の社會 奇怪なる賣淫の現象 姦淫詩人 モルモン宗 數項

明治文學家評論

新聲社 全一冊 定價三十錢
 同人著 郵稅金四錢

次目

三宅雪嶺 福地櫻痴 島田三郎 岩本善治 江見水蔭
 竹越三叉 内村鑑三 幸田露伴 田口鼎軒 國府犀東
 高山樗牛 松村介石 山路愛山 大町桂月 田岡嶺雲

高須梅溪君著
 平福百穂君畫

暮雲

價十二錢 郵稅四錢

梅溪子の美文は、優に文壇を横行するに足る。其辞の清麗、其想の秀雋、誰かよく比し得るものぞ。(製本已成)

次目 雲 暮

澱江を懐ふ 鐘聲
 墓畔の懐ひ 夕陽
 御茶の水橋 曙の星
 海のほとり 牽牛花
 風の音づれ 幻影
 秋の追憶 深林
 夏の田園 少女

空前の美本

一〇
 舁裁新奇、本文色刷
 用紙舶來上等光澤紙
 袋、表紙、扉、挿畫色刷
 印刷製本等精巧を極む

多恨の遊子、身は獨り、一壺の酒を友に湘南に遊ぶこと旬日、滿囊の詩想を披いて此著あり。景情双絶、詞彩煥發、一卷是れ無韻の詩、とりて水晶盤裡に盛るも可也。舁裁美を極め麗を盡くして、我社が明治文壇有數の傑作を遇するの微衷を現す。

川上眉山君著

定價廿六錢 郵稅四錢

ふところ日記

一條成美君畫

大町桂月君序 小林柳村君著 一條成美君畫 山中古洞君畫 (六版)

戀愛と文學

戀愛!! され實に人間最高の情想に非らずや。人世
されが爲に趣味あり、之が爲に平和あり、『戀愛と
文學』ありて、亦長く青春の子女を慰む可し。行
文艶麗、卷中の佳所は、朗々高く歌ふに足る可き者
あり。

正岡藝陽君著 (八版)

婦人の側面

世、本書の如く大膽に婦人を解剖したるものなく
本書の如く公平に婦人を論評したるものなし。流
麗快暢、趣味湧くが如き文字の間に、婦人の光明
と闇黒との両面を説明し盡くして、亦遺憾なし。

全一冊美本 定價二十錢 郵税金四錢

白露集

(總クローズ類美本)
文學士 久保天隨君 著
文學士 淺野馮虛君 合
文學士 戸澤姑射君
中村不折君 畫
下村爲山君 版
(定價參拾錢 郵稅四錢)

此集は、戀や、無常や、運命や、
人の世のあはれの數々を描きた
るもの也。人生の運命を知らん
とする者、自然の奧秘を叩かん
とする者は此集を繙け。若しそ
れ其文に至りては、誠に當代の
絶品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極
めて、一語一句鏗然耳に徹し、
煥然目を奪ふ。

新聲社同人作

青葉蔭

夏の野邊 蒲原有明 ●夏の田園 高須梅溪
夏の都府 田口掬汀 ●夏の水草 金子薫園
夏の深林 正岡藝陽 ●夏の海畔 西村醉夢
夏の追懷 奥村梅臯 ●夏の放言 崑崙山客
表紙百 繪口穂書

全一冊美本 定價拾五錢 郵税金二錢

妖堂居士著

文壇樂屋觀

文壇の下げ幕切つて落せば、捧腹すべきと極めて
多し。妖堂居士例の鼻の如き眼を以て、闇中捕捉
し得たる幾多の奇談珍話を、流麗なる快筆に彩り
て、之を世に傳ふ、一章一話、趣味溢る、斗りに
して、讀過一再、塵情忘却し去るべき也。

定價拾五錢 郵税金二錢

大日本文章學會編纂

文章形容辭典

類本 書は古今の文學書
より出所出し、形
容語を集め、題に
よりて分ち、順に
從つて次第し、難
解の句には、一々
明細なる註釋を附
せるなど、用意極
めて親切也。此書
を机上に置く時は
形容の辭句に苦む
るとの患をかゝるべし。

定價參拾錢 郵稅四錢

わか草

定價郵稅 共貳拾錢
春雨、烏水、葵山、梅溪、薰園、
醉茗、露葉、荷葉、花外子等の
小説美文を收めたる者。

森鷗外先生序文〔六〕 質問自由
大下藤二郎君著

水彩畫の葉

全一冊袖珍 定價二十錢 郵税金四錢
丁寧懇切、微を穿ち、細を明かにし、毫も素養なき初學の士をして、尚ほ且つ其堂奥に入るを得せしむる寶典也。各學校の修畫參考書として續々採用せらる。

河東碧梧桐君著

俳句評釋

全二冊 定價卅五錢 郵税金四錢
俳句は詩形の短小なるが故に、簡警朦朧を主とし、餘情を含蓄せしめ、且つ故事歴史等を援引し來るが故に、解し得可からざる者極めて多し、本書は此缺點を補ふものにて、古今の名句を選びて、丁寧懇切なる註解を加へ、且つ嚴正なる評論、其價値の存する所を明かにす。

新聲社同人著 (第四版)

三十棒

定價二十錢 郵税金四錢

『大坂毎日』批評 勇往の文縦横 筆、氣焰天に揚るの意氣あり、この抱負ありて、以て文壇に馳騁するに足る、亦一讀すべき好冊子也。

墳墓

定價二十錢 郵税金四錢

本書は人生の安息所とも云ふべき墳墓を描きたるもの、文字流麗、金聲にして玉振、まさに朗々高く歌ふ可し。

肖像

内田魯庵 江見水蔭 泉鏡花 内藤鳴雪

●廣津柳浪 ●小栗風葉 ●落合直文 (寫眞銅版印刷)

創作苦心談

下記二十家談話輯録

江見水蔭君 川上眉山君 廣津柳浪君 幸田露伴君 内田魯庵君 小栗風葉君 泉鏡花君 後藤宙外君 島村抱月君 久保天隨君 内藤鳴雪君 落合直文君

再版

新聲社編輯局編纂 全一冊洋裝、美本 定價貳拾錢郵四錢

再版

大學院文學士 文章學會講師 登張竹風君序 山川芳則君著

美文評釋

全一冊菊判 定價廿五錢 郵税金四錢

本書は、露伴、鷗外、眉山、桂月、一葉、樗牛、天隨、馮虛、姑射等十家の作中、散文詩と稱するに足るべき美文を評釋したるもの也。其評は嚴正にして、微疵尙ほ許さず、從來の之を指摘して後進の誤作を避けしむるが如き、從事となすもの、比に非ざる也。

新高須梅溪君記著

青年觀

再版發賣 定價十二錢 郵税金四錢

青年の意氣銷磨せるや久し矣。之を鼓吹し、之を指導するものは誰ぞ「青年觀」は最も忠實なる指導者也。最も熱誠なる鼓吹者也。全篇章を分つと十者也。開卷先づ、青年の本質を精論して、熱血淋漓たる「卷末の絶叫」に終る、文氣雄健、論議正大、眞個青年文壇の雄觀。

評釋叢書

成完冊六部全

定價	第六	第五	第四	第三	第二	第一
共金壹圓四十錢○各編讀切	古	英	國	俳	漢	漢
	詩	文	文	文	文	詩
	評	評	評	評	評	評
	釋	釋	釋	釋	釋	釋
		(版二)	(版二)	(版二)	(版再)	切品
	久保文 學士著	淺野文 學士著	內海文 學士著	阪本著 學士著	久保文 學士著	久保文 學士著

青年文學叢書

第六	第五	第四	第三	第二	第一
青	韻	論	美	美	文
年	文	文	學	文	學
之	作	作	大	作	攻
文	法	法	要	法	究
學	法	法	法	法	法

米藤桂華君文學士
江藤桂華君文學士
全部六冊
十錢郵
稅二錢
六部前
金郵稅
共六十
二錢